

船橋市東中山台遺跡群第19次調査地点

—地方特定道路整備委託（西船埋蔵文化財調査）報告書—

平成15年3月

千 葉 県
財団法人 千葉県文化財センター

ひがしなかやまだい
船橋市東中山台遺跡群第19次調査地点

—地方特定道路整備委託(西船埋蔵文化財調査)報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第450集として、船橋市の地方特定道路（都市計画道路3・4・15号本郷町古作町線）道路改築に伴って実施した東中山台遺跡群第19次調査地点の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代を中心とする集落が検出され、墨書き土器も多数出土し、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡　例

- 1 本書は、地方特定道路整備委託（西船埋蔵文化財調査）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、船橋市西船橋6丁目131番6ほかに所在する東中山台遺跡群第19次調査地点（遺跡コード204-012）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県の委託を受けて財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は東部調査事務所芝山調査室長 今泉 漢が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課（平成13年度まで文化課）、千葉県葛南都市計画事務所、船橋市、船橋市教育委員会、財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
 - 第2図 「大正・昭和 東京周辺 1万分1地形図集成—京葉・京浜・多摩地区—」柏書房 1:25,000
 - 第4図 船橋市地形図26（船橋市都市整備課）1:2,500を1:5,000に縮小
 - 第5図 船橋市地形図26（船橋市都市整備課）1:2,500を1:1,500に拡大
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年1月撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、すべて日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方針はすべて座標北である。
- 10 土器類の色調の表記に当たっては、小山正忠・竹原秀雄 1999『新版標準土色帖』（財）日本色彩研究所を参考にした。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 調査の方法	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 基本層序	4
3 歴史的環境	5
第2章 調査した遺構と遺物	9
第1節 遺構	9
1 概要	9
2 竪穴住居	9
3 掘立柱建物	15
4 土坑	18
5 溝状遺構	19
第2節 遺物	21
1 土器類	21
2 土製品	34
3 金属製品	34
4 自然遺物	36
第3章 まとめ	39
第1節 出土遺物について	39
第2節 墨書き土器について	40
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 上層遺構位置図と下層確認グリッド	2
第2図 調査地と周辺の遺跡	4
第3図 下層の土層断面	5
第4図 東中山台遺跡群の調査地点	6
第5図 調査地と周辺の調査	7
第6図 S I 001	10
第7図 S I 002	11
第8図 S I 004	11
第9図 S I 005	12
第10図 S I 007	12
第11図 S I 008	13
第12図 S I 009	14
第13図 調査地南半部の調査遺構	16
第14図 調査地北半部の調査遺構	17

第15図	S D001・S D002	19	第19図	S I 008出土土器	29
第16図	S I 001出土土器	21	第20図	S I 009出土土器	31
第17図	S I 002・S I 003出土土器	23	第21図	その他の出土土器・土製品・金属製品	34
第18図	S I 004・S I 005・S I 006・S I 007 出土土器	25	第22図	S I 002貝層堆積状況	36
			第23図	貝類組成図	37

図版目次

図版1 航空写真（昭和42年撮影）約1：10,000

図版2 1 S I 001全景（南東から）

2 S I 001カマド全景（南東から）

3 S I 001カマド内遺物出土状況（南東から）

4 S I 001カマド脇遺物出土状況（南東から）

5 S I 001カマド脇遺物出土状況（南東から）

6 S I 001焼土検出状況（南東から）

7 S I 001鉄滓出土状況（北から）

図版3 1 S I 002全景（南から）

2 S I 002貝層検出状況（南から）

3 S I 004遺物出土状況（南から）

4 S I 004全景（西から）

図版4 1 S I 005全景（南東から）

2 S I 005カマド周辺遺物出土状況（北から）

3 S I 005遺物出土状況（北西から）

4 S I 007全景（東から）

図版5 1 S I 007カマド周辺遺物出土状況（南から）

2 S I 007カマド周辺遺物出土状況（南から）

3 S I 007遺物出土状況（南から）

4 S I 007鉄器出土状況

5 S I 008全景（南から）

6 S I 008鉄器出土状況（南から）

1 S I 008鉄器出土状況（南から）

図版6 1 S I 008カマド全景（南から）

2 S I 008遺物出土状況（南東から）

3 S I 009全景（西から）

4 S I 009遺物出土状況（南から）

5 S I 009遺物出土状況（南から）

6 S I 009鉄器出土状況（南から）

7 S I 009鉄器出土状況（南から）

図版7 1 N a 区（S I 006）（南から）

2 N b 区（S B 004・S H 010）（北から）

3 N b 区（S H 011）（西北から）

4 N b 区（S K 002）（東から）

5 N c 区（S D 001・S D 002）（南から）

6 S D 001断面（西から）

7 N c 区（下層断面）

8 N d 区全景（北から）

1 N f 区（S I 003）（南から）

2 N g 区全景（南から）

3 S a 区全景（南から）

4 S a 区下層確認状況（南から）

5 S c 区南側（東から）

6 S c 区北側（西から）

7 S d 区（S B 002）（北から）

8 調査区周辺の状況（南から）

図版9 出土土器

図版10 出土土器・墨書き土器

図版11 墨書き土器・土製品・金属製品

表目次

第1表 S D 001出土土器組成表

第2表 貝類種名一覧

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

都市化が急速に進行している船橋市では、道路網の整備が追いつかず、これまで市街地を中心に慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。これは都心へ向かう幹線道路が中心市街地を通る一方で、幹線道路に接続する南北の道路整備が遅れていることが原因の一つと考えられている。そこで船橋市では、千葉県と連携しながら都市計画道路の整備を進めてきた⁽¹⁾。

松戸市大橋を基点とし、市川市原木を終点とする、一般県道松戸原木線もその一つである。同路線は、船橋市の西部を南北に貫いて臨海部と内陸部を結び、原木では京葉道路原木インターチェンジに交差する一般県道へアクセスし、産業道路・生活道路として重要な役割を担ってきた。しかし同時に国道14号線から中山競馬場方面への主要なアクセス道路にもなっており、とくに競馬開催時には交通渋滞が激しく、中山競馬場周辺道路の交通問題の解消は、大きな課題の一つであった。渋滞解消に向けて、広域情報提供システムの整備や新たなバスルートの整備など、関係機関で様々な対策案が検討されてきた。県道松戸原木線については、地方特定道路（都市計画道路3・4・15号本郷町・古作町線）として千葉県が事業主体となって、国道14号線と交差する地点から、中山競馬場前をすぎて北方十字路までの延長約500m、幅員18mで道路拡幅を行うことになった⁽²⁾。なおこの道路改築工事は、京成電鉄京成本線を跨ぐ西船跨線橋の橋梁耐震工事とも関連しており、橋梁工事に伴って県道松戸原木線の西側に迂回路が設置された。

事業実施に当たって、千葉県葛南都市計画事務所長から平成12年9月に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査とこれまでの周辺の発掘調査成果を踏まえて、同年10月に事業地内の一部に遺跡が所在する旨の回答をした。この回答を受けて、その取扱いを関係機関で協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

東中山台遺跡第19次調査地点の発掘調査及び整理作業・報告書刊行は2か年に及んでいる。各年度の作業内容等については以下のとおりである。

平成13年度 平成13年4月2日～同年5月31日

内容 （上層）確認調査 1,280m²のうち112m²・（上層）本調査 795m²

（下層）確認調査 1,280m²のうち44m²・（下層）本調査 0m²

北部調査事務所長 石田 廣美 副所長 石倉 亮治 調査担当者 主席研究員 高橋 博文

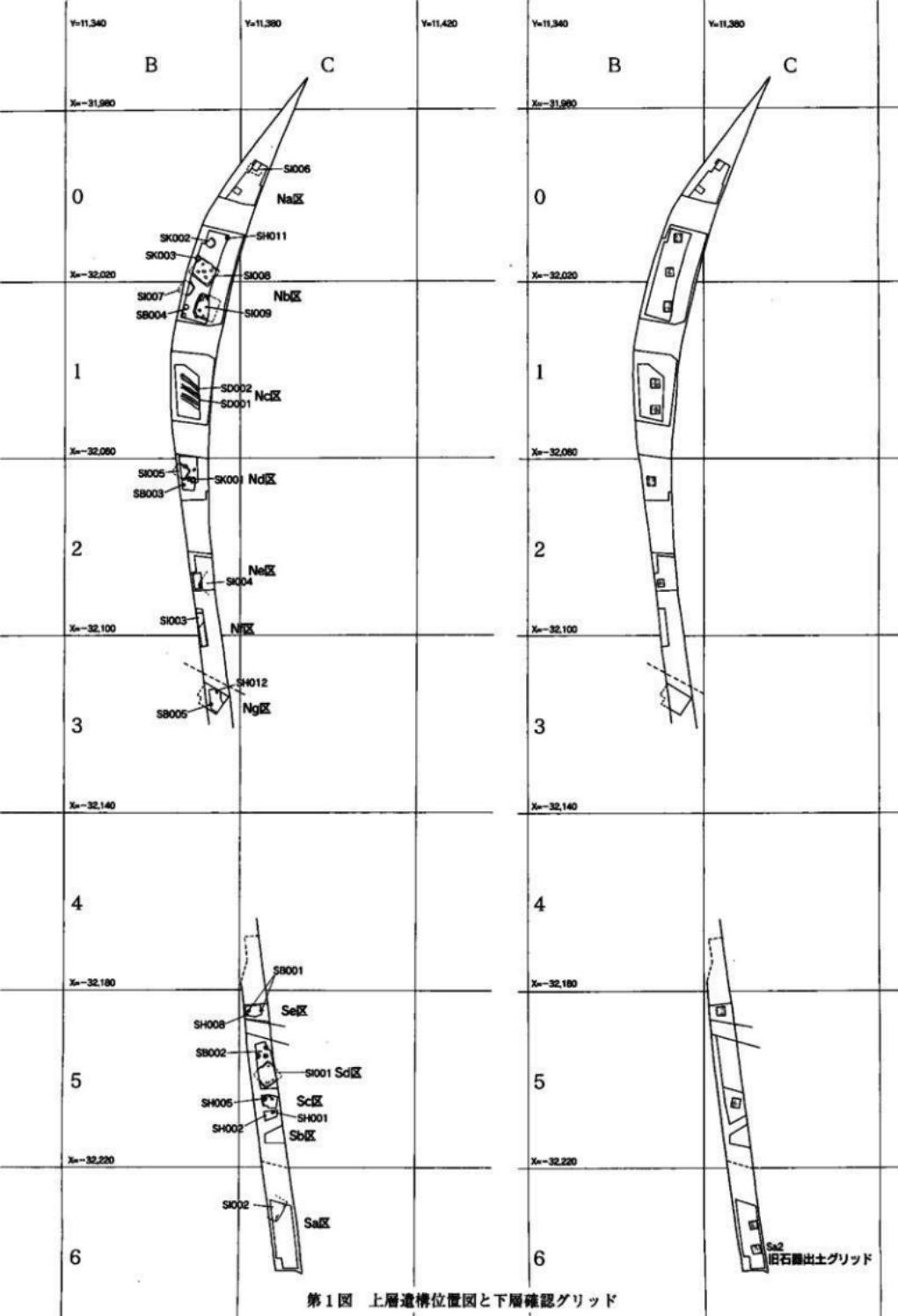
平成14年度

内容 分類・選別から原稿執筆・報告書刊行

東部調査事務所長 折原 繁 副所長 石倉 亮治 調査担当者 室長 今泉 潔・研究員 黒沢 崇

3 調査の方法（第1回）

東中山台遺跡群は、船橋市教育委員会、財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター、船橋市遺跡調査会、そして当センターによって継続的に発掘調査が実施してきた。過去には本郷台遺跡とい



第1図 上層遺構位置図と下層確認グリッド

う名称も存在したが、現在では東中山台遺跡群に統一され、それぞれの調査地点ごとに通し番号が付され、今回の調査地が第19次調査地点に当たることから、「東中山台遺跡群第19次調査地点」とした。

調査に当たっては、調査地全域に国土方眼座標（第IX座標系）の方眼網を設定し、基点をX = -31,900, Y = 11,300とし⁽¹⁾、そこから40m × 40mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は基点から南北方向に南へ0・1・2、東西方向には東へA・B・Cとし、この数字とアルファベットを組み合わせて大グリッド名とした。そして大グリッドをさらに4m四方に分割し、北西隅を00、南東隅が99になるように割り振り、これを小グリッドとした。調査ではこれらを組み合わせて、例えば1 B25というように表記し、遺構図面等に記録する際に使用した。

また今回の調査地点は、路線に沿って240mと南北に細長く、しかも個々の調査区が調査地内に点在するために、個々の調査区にも区名を付した。調査地のほぼ中央を横切る京成電鉄京成本線を境にして、北側については北からN a 区・N b 区の順にN g 区まで7か所の調査区、南側については南からS a 区・S b 区の順にS e 区までの4か所の調査区名を設定した。ただしS c 区は、調査区の中央より南側に東西方向のガス管が埋設してあって、厳密にはそこでも調査区が南北に分断されている。これらの調査区名は、主に表土中から出土した一括遺物の取り上げ時の表記に使用し、本書でも必要に応じて適宜使用する。

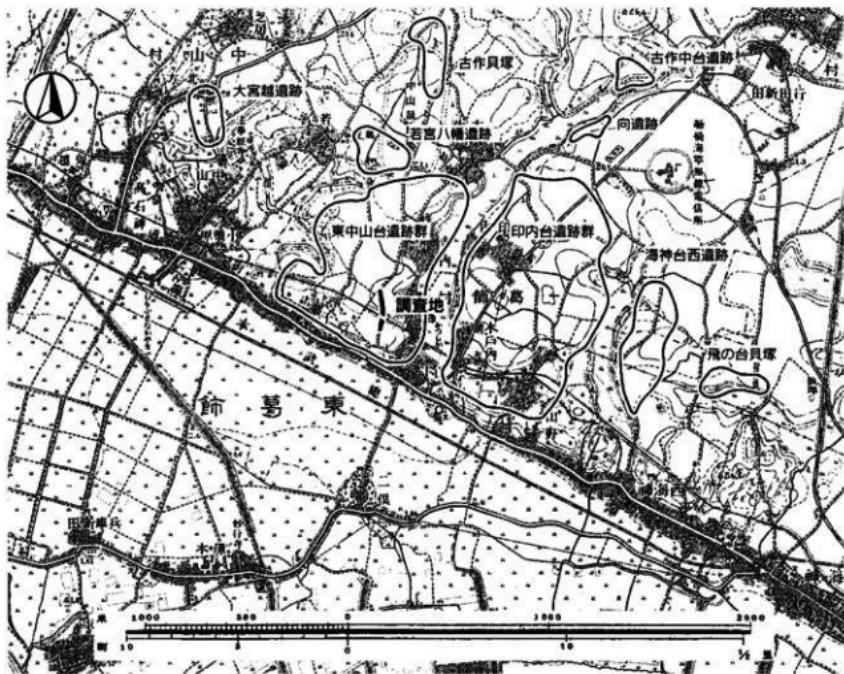
調査地の中央より南側には、京成電鉄京成本線が通り、その部分を除く大半の現況はアスファルト舗装の歩道や、調査地の東側に隣接する民家、社屋、駐車場などへの進入路などであった。進入路を除く歩道部分のアスファルトについては調査着手以前に撤去されたが、進入路については生活道路でもあったので現状のまま調査することとなった。調査区が細切れに点在するのも、線路や進入路等によって調査地がいくつにも寸断されたからである。また調査地内には、ガス・水道の主管と引込み管が埋設されており、その部分についても調査を行うことができなかった。さらに西船跨線橋の橋梁耐震工事に伴って、線路の両脇に作業ヤードが設置され、排土も調査地内で処理したために、調査範囲はかなり限定されたものになってしまった。

上層の確認調査については、幅2mのトレチを任意に設定して、112m調査した。その結果、奈良・平安時代を中心とする竪穴住居・掘立柱建物・溝などを確認した。その調査結果は隣接地や周辺の調査成果とも符合するものであった。そこで調査用地が確保できた795mについて、本調査を実施することとなった。下層の確認調査については、上層の本調査終了後に実施し、2m × 2mのグリッドを任意に設定して、調査対象面積の約3%について実施した。その結果、S a 区に設定したグリッドの一つ（S a 2）で、Ⅴ層から剥片が1点だけ出土したが、1点だけの出土だったので本調査には至らなかった。なお出土資料は2次の加工痕跡が認められない単なる剥片だったので、図示はしていない。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境（第3図、図版1）

調査地は船橋市西船橋6丁目131番6ほかに所在し、船橋市のもっとも西寄りに位置し、市川市と接している。路線ではJR線・京成電鉄京成本線の西船橋駅の西北約900m、京成電鉄京成本線の京成西船駅と東中山駅のほぼ中間に位置する。調査地周辺では、JR線と京成本線に挟まれた一帯を中心に市街地化が進んでおり、かつての地形はほとんど市街地のなかに埋没している。東中山台遺跡群が位置する台地は、大きくは東葛台地と呼ばれる下総台地の西部を構成する平坦な台地で、東京湾に向かって徐々に標高が低



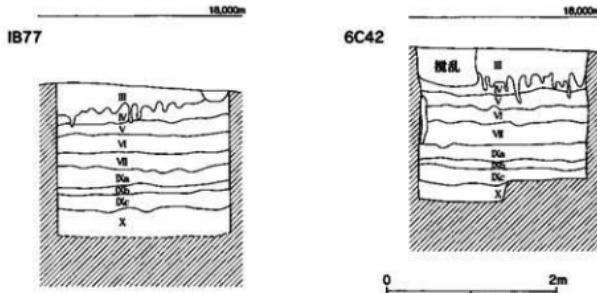
第2図 調査地と周辺の遺跡

くなる⁽¹⁾。東中山台遺跡群は、そうした東葛台地の一郭に位置している。台地の西側には大柏川の支流によって開析された大柏谷渓谷が発達し、その小支谷によって台地はさらに樹枝状に浸食されている。東側には東京湾に注ぐ葛飾川によって開析された古作谷が台地奥部まで浸食しており、台地を東西に二分するような景観をとどめている。東京湾側の台地裾部は京成本線とJR線のほぼ中間、国道14号線（旧千葉街道）の通るあたりが台地裾部になる。一帯には海浜から吹き上げた砂によって砂丘が形成され、西方からは沿岸流によって市川砂州の東端が延びてきている。さらにその先の海浜側には海岸沖積平野が広がり、かつては遼浅の海として、良好な海水浴場として利用できた。台地北側は柏井台に至るが、その境付近は東西から支谷が奥深く浸食しており、台地の幅を非常に狭くしている。

調査地の平坦面における標高は18.7m前後で、台地裾部との比高は約14mある。また台地中央部との比高は2mほど低くなる。

2 基本層序（第3図、図版7）

上層の層序についてはとくに記録を作成していないので、下層の立川ロームの層序について説明をしていく。Ⅲ層は黄褐色の軟質ローム層で、V層の上部まで波状の軟質化が進行している。上層の調査面になる。IV層は黄褐色ローム土で、赤色スコリアを少し含む。層厚は15cm～20cmである。V層は暗黄褐色ロームで、赤色スコリアを多く含む。層厚は20cm前後である。VI層は明黄褐色のいわゆるAT層である。白色



第3図 下層の土層断面

バミスを多量に含む。層厚は25cm前後である。VII層は暗黄褐色ローム土で、第2黒色帯上部に相当する。ATの白色バミスを少し含み、ATはこの層まで拡散している。層厚は20cm～25cmである。Sa2で剥片が出土したのはこの層である。IX層は第2黒色帯上部に相当し、3層に分層した。色調は全体にVI層よりは暗い、暗黄褐色である。IXa層は赤色スコリアを含む。層厚は15cm～25cmで、あまり一定していない。IXb層はIX層の中間層で、IX層のなかではもっとも明るい層である。層厚は10cm前後で比較的安定している。IXc層はIX層のなかではもっとも暗い層である。赤色スコリアを多く含んでいる。層厚は20cm前後である。X層は明褐色のローム土で、立川ロームの最下層になる。

3 歴史的環境（第4・5図）

東中山台遺跡群は「本郷台遺跡」とも呼称され、考古学的な調査が始まってしばらくは本郷台遺跡という名称で報告書も刊行されてきた。遺跡名が「東中山台遺跡群」に落ち着くまでのあいだには、確認調査で「東中山台遺跡群」としていた調査地が、本調査では「本郷台遺跡」となる場合もあり、遺跡名と調査次数に関してはかなり煩雑な状況になっている。したがって本書は遺跡名に「東中山台遺跡群」を冠してはいるが、本郷台遺跡の調査次数も数えて、第19次の調査地点になるので、遺跡名の後に括弧書きで調査次数を明記している。

東中山台遺跡群は遺跡の総面積が約45haという広大なもので、そして東側の古作谷を挟んで対峙する印内台遺跡は、遺跡面積が約70haといわれており、両遺跡をあわせると100haを超える広大な遺跡面積になる⁽³⁾。本格的な集落の出現時期は印内台遺跡が7世紀初頭とやや先行するが、奈良時代になると両遺跡で大規模な集落を形成するようになる。そして11世紀代にはいずれも集落の終焉を迎えるようである。

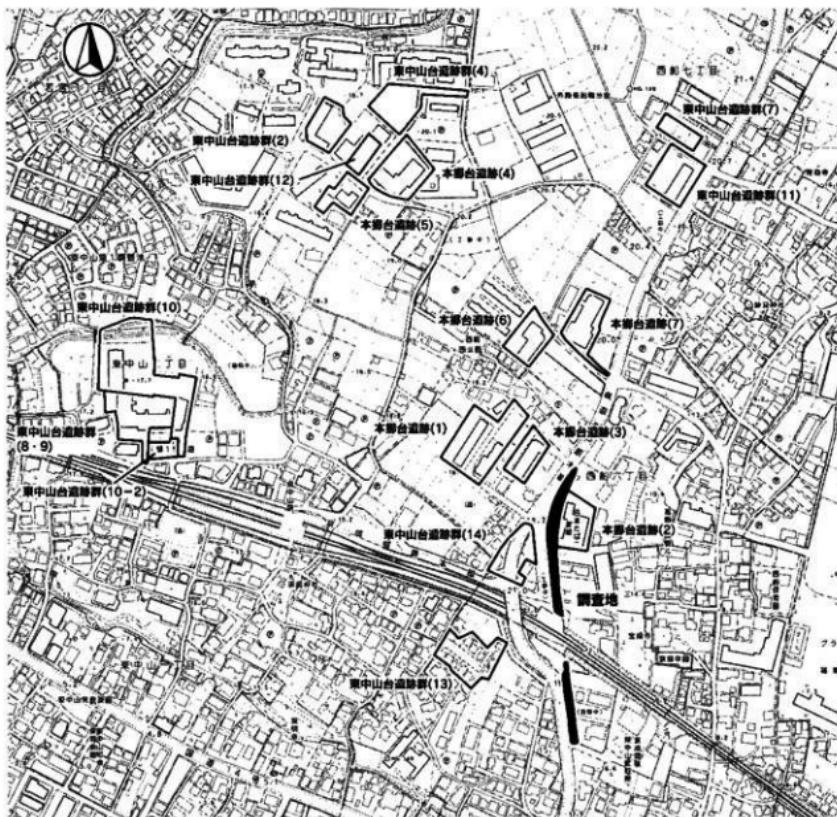
東中山台遺跡群の調査はいずれも1,000m²規模の調査地点で、それらが遺跡内に点在する。遺跡群の西部を調査した東中山台遺跡群8・9・10・11次調査地点では、中世の大小の台地整形区画・地下式坑・火葬墓・粘土貼土坑・掘立柱建物などが比較的集中してみつかっており、大正年間に消滅したといわれる小栗原城跡に関連する遺構群と考えられる⁽⁴⁾。それ以外の調査地点は、本遺跡群を特徴づける奈良・平安時代の遺構群が主体となる。ここでは調査地近傍の調査内容について概要を記載しておくことにする。

調査地北半部の南西約80mに位置する本郷台遺跡第1次調査地点は、東中山台遺跡群における最初の本格的な調査になる⁽⁵⁾。7世紀末から11世紀代のあいだ集落は営まれ、主体となる時期は8世紀後半から9世紀代にかけてである。堅穴住居は16軒あり、主に調査地の北半部に掘立柱建物と微妙に重複しながら位置している。掘立柱建物は最低でも15棟あり、2間×3間の側柱建物が主体である。また8世紀後半か

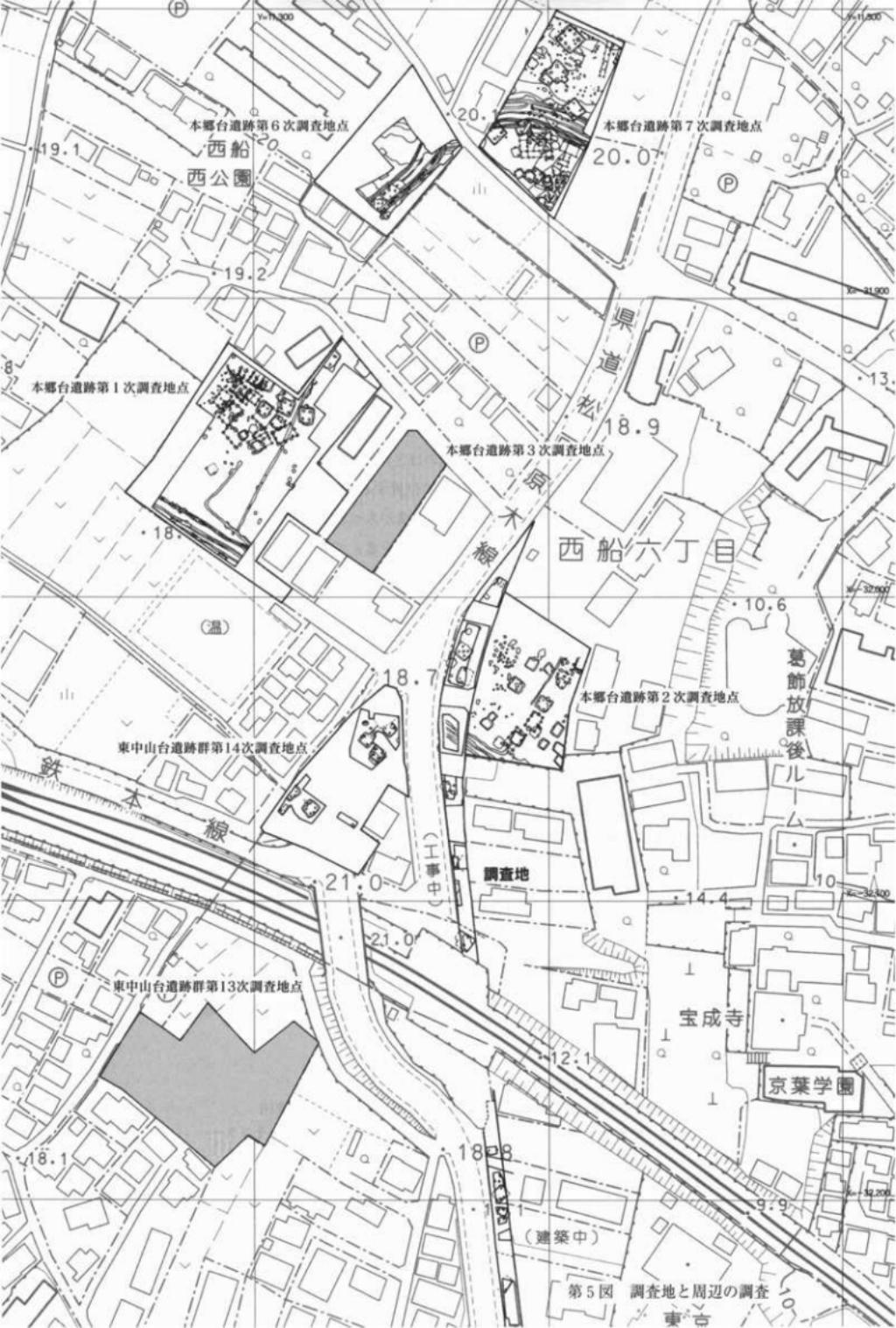
ら9世紀前半にかけて調査地の一郭が墓域となり、木棺直葬墓・土壙墓・火葬墓、そして馬葬塚などがみつかっている。調査区南半部に位置する溝状造構は、北西・南東方向に斜行する溝状造構（第2・3号溝）は、今回の調査地でみつかったS D001・002に連続するものである。居住城はこの溝から20mほど離れており、この一帯では居住城と溝のあいだに空隙地帯を設定していたことになる。これらの溝は、その断面形態から古代道の一例ともいわれている⁽¹⁾。出土遺物として特徴的なのが墨書き器で、200点以上出土しており、その大半を「福」・「永」の1文字がしめている。また須恵器には東海・下総・上総諸窯の製品があり、土師器の甕には武藏型の長胴甕がある。

この第1次調査地点の東側に隣接するのが第3次調査地点である。約1,100mを調査して、奈良・平安時代の堅穴住居6軒を調査している。出土資料としては、土器類以外に獸骨類・貝類が出土している⁽²⁾。

本郷台遺跡第2次調査地点は、今回の調査地北半部の東側に隣接する。集落は8世紀中葉から10世紀前半にかけて営まれ、堅穴住居17軒、掘立柱建物4棟以上、火葬墓などが確認されている⁽³⁾。また第1次



第4図 東中山台遺跡群の調査地点



第5図 調査地と周辺の調査

調査地点と同様に、調査区南半部で斜行する溝（D02・D03）を確認しており、第1次調査地点を含めてこの溝が延長150mまで走行することがわかった。なおこの一郭では居住域が溝の際まで迫っており、第1次調査地点とはやや様相が異なる。出土遺物として特徴的なのがやはり墨書き土器で、出土点数は40点ほどと少ないが、その約半数を「井」またはその変異形がしめている。この文字内容は、今回報告する墨書き土器の内容とかなり共通する部分がある。

調査地中央部の県道（松戸原木線）を挟んで西側には東中山台遺跡群第19次調査地点が位置する⁽¹¹⁾。近年の擾乱がひどく、耕作による天地返しも多く、遺構の遺存状態は極めて悪かった。それでも奈良時代後半の竪穴住居4軒、平安時代の竪穴住居6軒を調査している。調査区の北側は、図上では斜行する溝の一部が走行する部分になるが、擾乱のため確認されていない。ただ溝自体は確認されていないものの、居住域が溝の際まで迫っていたことは確実なので、第2次調査地点と同じような空間構成であったことがわかる。なお掘立柱建物は未検出である。出土遺物としてはこれまでの調査地点とは異なり、墨書き土器はほとんどない。また須恵器の出土比率の高いが、生産窯のほとんどを県内の諸窯がしめると考えられている。

調査地の北100mには第6・7次調査地点が近接して位置する。第6次調査地点では、8世紀前半の竪穴住居と、それを切って開削された、南西・北東方向の溝がみつかっている⁽¹²⁾。そしてその溝は第7次調査地点までは延長しており、そこで大きく東に走行方向を変えている⁽¹³⁾。竪穴住居は20軒確認しているが、そのうち帰属時期の判明したものは7世紀後半が2軒、8世紀代は5軒、9世紀前後が1軒となっている。また掘立柱建物としては2間×3間の身舎の周に庇がとりつく四面庇の建物を1棟確認している。出土遺物としては、須恵器は8世紀中葉までは主に湖西産・新治産がその大半をしめ、水田・不入窯と思われる製品は散見する程度である。また下総固有の内外面赤色塗彩土師器壺は8世紀中葉から出現する。土師器では常緑型の壺が8世紀中葉以降みられるが、それまでは武藏型の壺が主体となっている。なお墨書き土器はほとんど出土していない。

このように近隣の調査内容をみただけでも、ほぼ同時期の集落の一部にもかかわらず、調査地点ごとに遺構・遺物の内容にかなり差のあることがわかる。

注1 市長公室広報課 2002「広報ふなばし」11月15日号 №1031

2 平成8年第4回船橋市議会定例会会議録（第3号・6）による。

3 この起点は、Web版TKY2JGD Ver.1.3.79 バラメータ Ver.2.1.1による日本測地系ベッセル椭円体での緯度経度値は、北緯35°42'44.55154"、東経139°57'29.65121"で、世界測地系GRS-80椭円体での座標値はX = -31,544,6843, Y = 11,006,7970で、緯度経度値は北緯35°42'56.20315"、東経139°57'17.94945"になる。

4 杉原重夫 1971『市川市史』第1巻 原始古代 市川市

5 道上 文ほか 1998「本郷台遺跡」「千葉県の歴史」資料編 考古3（奈良・平安時代）千葉県

道上 文ほか 1998「印内台遺跡」「千葉県の歴史」資料編 考古3（奈良・平安時代）千葉県

6 (財)千葉県文化財センター 1997「千葉県埋蔵文化財分布地図（1）—東葛飾・印旛地区（改訂版）」

7 関崎文喜ほか 1980「本郷台」本郷台遺跡調査団

8 注7に同じ。

9 (財)船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センターの資料による。

10 岡崎文喜ほか 1983「本郷台II」船橋市遺跡調査会・本郷台遺跡第2次調査団

11 岸本雅人 2000「船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点」(財)千葉県文化財センター

12 小林正之 1996「本郷台遺跡—第6次調査報告書」船橋市遺跡調査会

13 荒井英樹ほか 2000「本郷台遺跡第7次発掘調査報告書」船橋市遺跡調査会

第2章 調査した遺構と遺物

第1節 遺構（第6～14図、図版2～8）

1 概要

奈良・平安時代の竪穴住居9軒を調査したが、調査区にかなり制約があったために、竪穴住居全体を調査できた例はなかった。しかし、竪穴住居の時期がかなり定型的なデザインを採用する時期なので、竪穴住居の部分的な輪郭でも、それにもとづいてできるかぎり本来の輪郭を推定して図示した。ただ調査区が小さかったために、竪穴住居の輪郭の一部すら把握できなかつた竪穴住居もある。それらについては位置を全体図に記載するにとどめた。

竪穴住居とあわせて掘立柱建物も確認したが、また掘立柱建物を構成すると思われる柱穴も確認したが、狭い調査区のなかで個々の柱穴の組み合わせまで把握するには限界があった。明らかに建物を構成すると思われる柱穴については、その組み合わせにしたがって遺構の略号にSBを付し、そうでない坑については、掘立柱建物の一部の柱穴になる可能性のあるものについて、遺構の略号としてSHを付してある。ただし断面観察の結果等に照らすと、必ずしもそれがすべてに踏襲されているわけではない。

なお今回の報告に当たって、遺構番号については調査当初のまま使用した。

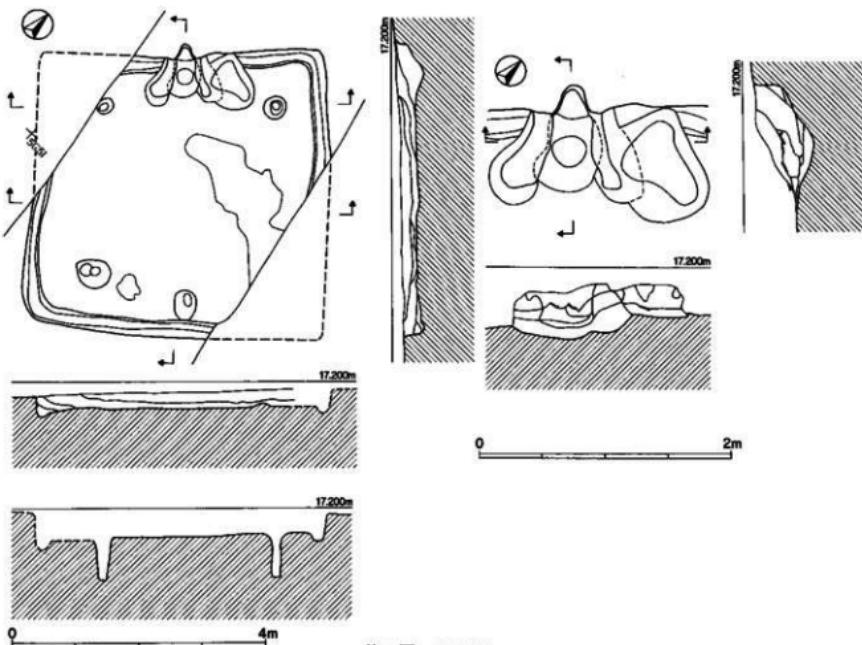
2 竪穴住居（第6～14図、図版2～5）

S I 001（第6図、図版2）

S d区の5C41に位置する。住居4辺の各壁が一部なりとも確認でき、住居全体のおよそ80%を調査できた。主軸長4.75m、副軸長4.45mで、副軸長方向にやや長いほぼ正方形の平面形態である。主軸をN-43°-Wにとる。深さは26cmほどで、それほど深くはない。埋土はローム粒を含む黒褐色土が主体で、顕著な埋戻しの形跡はなかった。住居の各隅には主柱穴があり、東隅の柱穴だけ調査区外になる。西北壁のほぼ中央にカマドを設置し、その対向壁の近くには出入り口ピットを設けている。出入り口ピットは住居中央寄りに下端があって、断面が外に向かって斜めになる掘形である。

床面にははっきりした硬化面はなかったが、住居東隅から中央に向かって焼土が数cmの高さで堆積していた。なお出入り口ピットの西側に、およそ30cm四方の範囲で焼土が堆積し、床面が焼けて硬化していた。その範囲を中心に鉄滓がまとまって出土しているので、小鍛冶の炉床の可能性が強い。壁溝はカマドの部分以外では確認できたので、おそらく全周するのであろう。壁溝の幅は25cm前後あり、深さも10cm程度ある。主柱穴のうちカマドの両脇に位置する2本は、掘形径が25cm～40cmのほぼ円形になり、深さはいずれも70cm前後ある。南隅の主柱穴は掘形の最大径が56cmと大きく、掘形の中位にも段があり、上記2本の柱穴とはやや形態が異なる。柱穴の建て替えか、それとも添え柱を抱かせた痕跡なのかもしれない。深さは65cmである。

カマドは山砂を構築材として両袖を作っており、遺存状態は比較的よかつた。ただ袖の内側には明瞭な被熱痕跡は確認できなかった。むしろ火床部に当たる部分で硬化した赤褐色土が堆積していた。煙道部は50cmほど地山を外側に掘り抜いている。なおカマド右袖の右側に、60cm×90cmの範囲に山砂の堆積を確認した。その上面からは土器片も数点出土し、それらの接合資料が住居南東隅近くからも出土している。土器片の出土した上面がこの堆積の本来の上面であるのかどうかわからないが、かりに本来の上面だとすれ



第6図 S I 001

ばカマド脇の棚状施設になる可能性もある。しかし床面の焼土の堆積状況は、床面に焼けた形跡がなく出土した土器片の接合状況をみても、むしろ住居の廃絶に伴って、カマド脇に山砂を積み、土器等を廃棄処分した可能性が強いように思える。

遺物の大半は土器類で、カマド周辺とその西側から主に出土した。土師器壺（4）はカマド西側から、床面に口を伏せた状態で出土し、そのすぐ近くからは土製支脚（1）がカマドから抜かれて出土しており、住居の廃絶時にカマドを破壊する行為があったようである。

S I 002 (第7・22図、図版3)

今回調査したなかではもっとも南に位置する竪穴住居である。S a区の6 C 22に位置する。調査区内で南東壁の一部を確認したが、住居内には攪乱も多数あり、調査条件是非常に悪かった。住居の規模については、深さは34cm前後で、主軸を住居の壁の方位で測るとN—58°—Wになる。柱穴は2本あり、北側の1本はほぼ円形で、掘形径が35cm、深さ16cmほどと浅い。もう1本は壁際にあり、壁溝と重なる。掘形長径48cm、深さは34cmほどになる。壁溝は深くても2cmほどしかなく、かなり浅い。

住居中央部と考えられる範囲で住居内貝層を確認したが、攪乱が多く、本来の散布範囲よりかなり狭い範囲しか記録できなかった。貝層の堆積は住居床面までは到達せず、住居床面直上に堆積する暗褐色土の上に堆積していた。貝層は約40cm四方の範囲で5cmごとにサンプリングした。貝種としては、ハマグリ・マガキ・シオフキ・ウミニナ・マテガイなどがあった。

出土遺物としては、土師器壊(8)が住居の中央で、床面よりやや浮いて出土した。

S I 003(第13図、図版8)

N f区、2B87・97に位置する。N f区は幅約1.5mで、遺構確認面までの深さが1.6m~1.8mもあり、精査の初期段階で、掘削面に亀裂があり崩壊の危険があったので、およその住居の輪郭を捉え、出土遺物を回収して調査を終了した。したがって遺構図面については省略した。竪穴住居は調査区の北半分以上に広がり、調査区のなかで確認した輪郭は、住居の南東壁になり、その方向はN-52°~Eになる。

出土遺物としては、土器類に混じって金属製品がやや多く出土している。

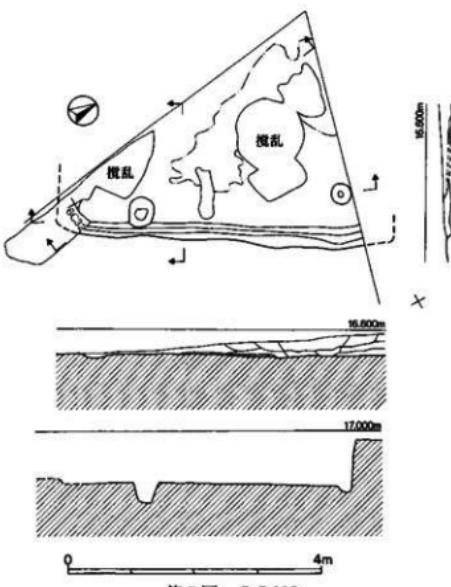
S I 004(第8図、図版3)

N f区、2B67・77に位置し、住居の西隅周辺だけが調査可能であった。主軸はN-35°~Eとなり、深さは50cm前後になる。埋土は暗褐色土が主体になって堆積しており、そこに焼土粒・炭化粒などが混じっていた。壁溝はなく、柱穴や床面が硬化した形跡もとくに確認できなかった。なお南北壁際で、重複する落ち込みを確認した。30cmほどの深さがあり、重複する竪穴住居の可能性もあるが、平面・断面でもその形跡をはっきり把握できなかったので、詳しいことはよくわからない。

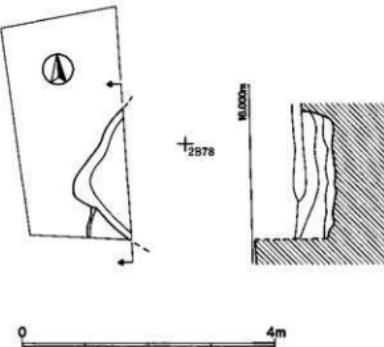
出土遺物は狭い調査面積ながらも、土器片の出土量が比較的多かった。とくに土師器壊(21)は完形で、口縁を上に向けて床面から出土した。

S I 005(第9図、図版4)

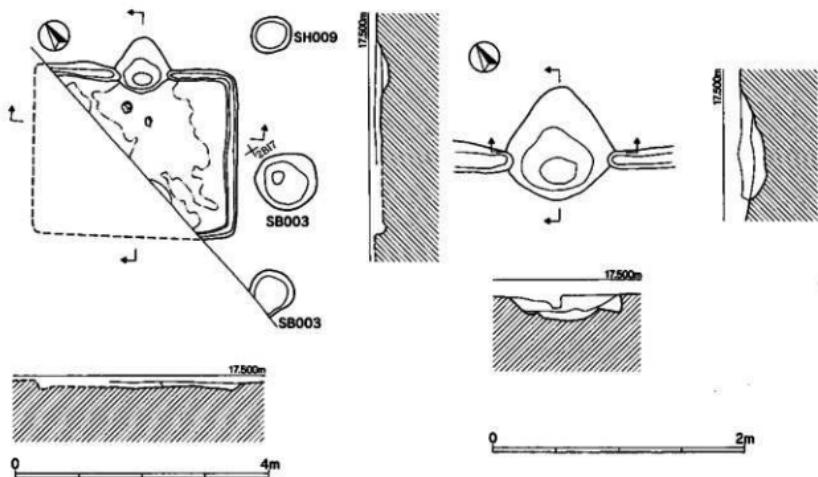
N g区、2B06・16に位置する。住居の約2分の1を調査した。主軸長は2.7m、副軸長はカマドが北東壁中央に敷設されていたとすれば、3.2mになる。そうすると副軸方向に長い、長方形の平面形態になる。深さは浅く、5cm~8cmである。壁際を除いて床面全域に、床面の硬化範囲が広がっていた。埋土はロームブロック・ローム粒を多く含む暗褐色土の単一層であった。調査した範囲では壁溝がめぐる。柱穴はなかったが、カマド対向壁近くの調査区境界で、住居の柱穴とするにはやや掘形が大きい落ち込みの一



第7図 S I 002



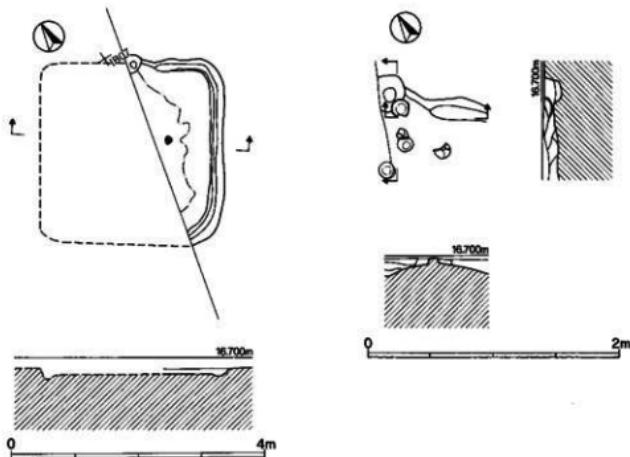
第8図 S I 004



第9図 S I 005

部を確認した。境界線上にあったために精査できなかったが、住居の南東側にはSB003を構成すると考えられる柱穴2本を確認しているので、柱筋の通りは悪くなるが、この落ち込みもSB003を構成する柱穴の1本である可能性が強い。ただ住居との新旧関係については不明である。

カマドは住居の廃絶に伴ってほとんど破壊されたようで、カマド構築材の白色粘土や山砂ブロック・焼土粒がカマドの周辺に散っていた。その行為に伴って土器類も投棄されたのであろうか、出土遺物は主にカマドとその周辺に多かった。



第10図 S I 007

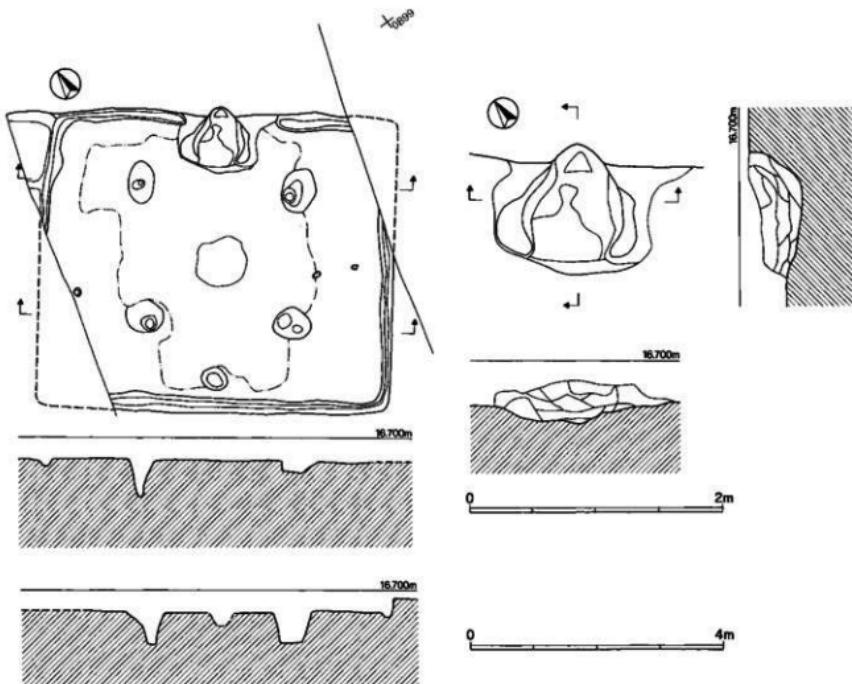
S I 006 (第13図, 図版7)

Na区, 0 C31を中心に位置する。調査区が住居の範囲のなかに取まり、図面等の記録類もないために、住居の構造については不明である。出土遺物も一括して取り上げたものである。

S I 007 (第10図, 図版4・5)

Nb区, 1 B06・07に位置し、同じ調査区内で北にはS I 008, 南東にはS I 009が位置している。およそ住居東側の3分の1を調査したことになる。カマドを西北壁中央に敷設していたとすれば、主軸長・副軸長とも2.9mの正方形の平面形態に復原できる。今回ある程度規模のわかった住居のなかではもっとも小さい住居になる。南東壁はN-33°-W方向で、住居主軸もこれに近い軸方向と思われる。床面までの深さは8cmほどと、S I 005と同じように非常に浅い。調査した範囲では壁溝が遡るが、柱穴は確認できなかった。住居の中央よりでは、床面の硬化範囲を確認できた。

カマドは構築材をほとんど残していないので、S I 005同様、住居の廃絶に伴ってカマドが破壊されているようである。カマド及びその周辺から、被熱痕跡がほとんどない、完形に近い土師器壊(37・38・39・42)が4点出土している。出土遺物はこのほかに住居中央から、土師器壊(40・41)が2点重なって出土した。



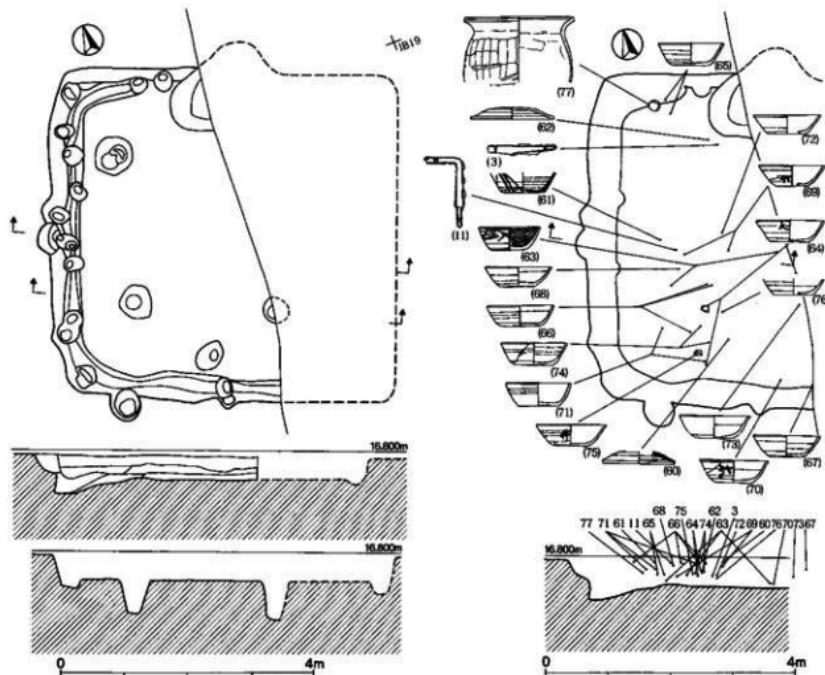
第11図 S I 008

S I 008 (第11図、図版5)

N b 区、上記の S I 007 の北側で、0 B97・98に位置する。住居西側に S K 003 が重複するが、調査時の所見では、S K 003 が住居を切っている。住居の東・西隅が調査できなかったが、主軸長5.6m、副軸長が4.8mになる、副軸長方向にやや長い堅穴住居である。主軸をN-36°—Eにとる。住居の深さは24cm～28cmほどある。壁溝はカマドを除いて全周するようである。住居の4隅近くには主柱穴を4本配り、カマド対向壁近くには出入り口ピットがある。主柱穴の掘形は比較的大きく、長径で60cm～70cmあり、カマドの前に位置する主柱穴の2本は掘形が南北方向に長く、残り2本は東西方向に長くなる傾向がある。深さはカマド右前の主柱穴がもっとも浅く36cm、それ以外は50cm～62cmある。出入り口ピットの深さは20cmほどである。カマドの脇から柱穴に囲まれた範囲の床面が硬化していた。また住居中央には直径80cmほどの範囲で、床面が被熱して赤くなっていたが、それ以外には焼土の顕著な散布は認められなかつたので、住居の床を直接焼くような行為でもあったのであらうか。なお鉄滓等は出土していない。

住居の埋土は暗褐色土を主体とし、ローム粒・ロームブロック・焼土を含む。なお住居埋土の断面観察時に、床面より数cm上にも床面らしい硬化した面を確認した。最終的な床面の可能性もあるが、詳細は不明である。

カマドは北東壁のほぼ中央に敷設しており、遺存状態は比較的よかつた。煙道部は住居の壁を10cmほど



第12図 S I 009

切り込んでいる。火床部は地山を15cmほど掘りくぼめて、5cmほどの厚さで山砂を敷いて、火床面としている。両袖は灰白色の山砂とロームブロックを構築材としている。

住居内からはかなりの土器片が出土したが、床面よりはやや浮いた状態で出土しており、最終的な床面がやや上とすれば、これらは最終時の床面上から出土した可能性がある。

S I 009 (第12図、図版6)

N b 区、上記の S I 008 の南側、1 B 07・17に位置する。住居の西側半分が調査できたことになる。主軸はN-20°-Eにとる。主軸長5.3m、副軸長は推定で5.3mのほぼ正方形に近い平面形態と思われる。深さは33cm~40cmになる。壁直下には幅広の壁溝がめぐり、壁溝内には20cm~40cmの小ピットがいくつもある。主柱穴は、住居の各隅に1本ずつ配るものと思われ、そのうちの3本を調査した。掘形の長径は55cm~60cmで、深さはいずれも60cm程度になる。そして南壁の中央付近には、深さ14cmの出入り口ピットがある。この住居は、基本的な構造を維持しながらも、床面をさらに高くし、カマドの位置を変えた形跡があった。床面については、最終的な床面を主にカマド周辺で部分的に確認できたにすぎないが、前の床面に数cmから10cmほど暗灰褐色土を入れ嵩上げして、最終的な床面にしていたようである。

最終的なカマドは北壁中央に設置されたが、掘立柱建物の柱穴によってほとんど壊されており、カマドの構造に関してはほとんど不明である。この柱穴はカマド断面を精査した段階でみつかったもので、断面観察によると、深さは40cmほどで、柱穴中央に直径25cmの柱痕跡があり、その周囲をカマド構築材と思われる土で充填されていた。なおこの柱穴についてはとくに遺構番号は付していない。また前段階のカマドについては、西壁のほぼ中央に、壁を30cmほど掘りくぼめた煙道部分がわずかに残っていた。その付近の最終的な床面下には、山砂をブロック状に含む暗褐色土を確認しただけで、構造的な痕跡までは残っていなかった。

3 掘立柱建物 (第13図、図版7・8)

S B 001・S H 008 (第13図)

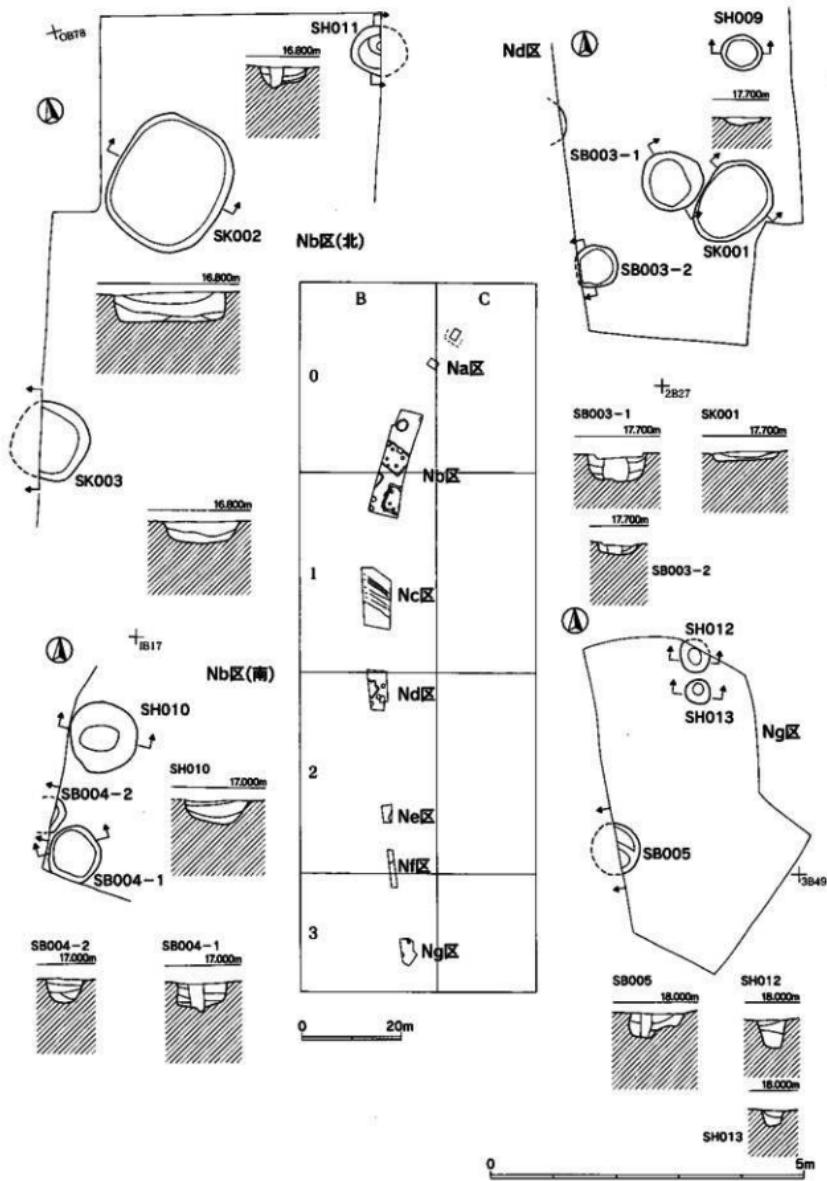
S e 区、5 C 10・11に位置する。S B 001としたものは東西方向の2本の柱穴だが、柱間で2.9mあり、掘形径で60cmほどしかないにしては、あまりにも柱間寸法が大きすぎるというきらいがある。あるいは別個の掘立柱建物の柱穴と考えたほうがよいかもしれない。深さはいずれも25cm程度で、断面観察で直径20cmほどの柱痕跡を確認した。S H 008は南西隅でその一部を確認しただけなので、詳しいことはわからない。

S B 002 (第13図、図版8)

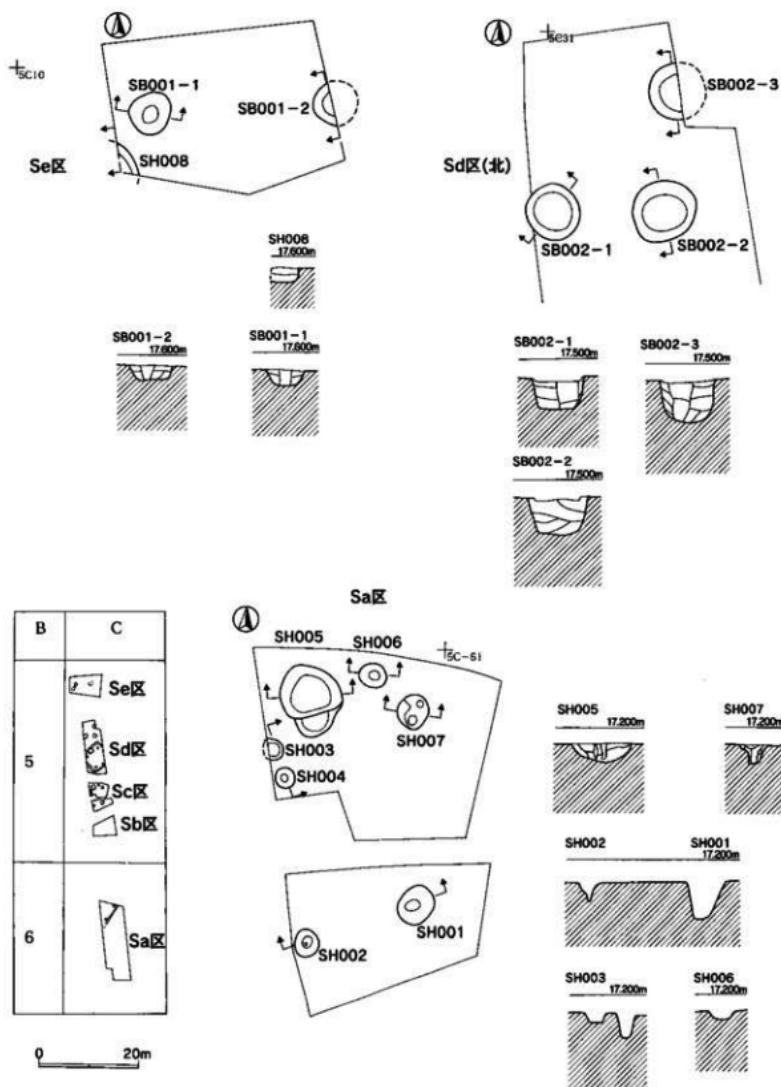
S d 区、S I 001の北側、5 C 30・31に位置する。側柱建物の南西隅を構成する3本の柱穴になる。柱間寸法はそれぞれ180cm~190cmになる。建築方位はほぼ北を示す。掘形径は85cm~100cmあり、隅柱の掘形がやや大きい。深さは52cm~68cmあり、柱穴1がもっとも深くなる。柱穴1・3で柱痕跡を断面で確認できた。柱穴1では掘形のやや南によった位置で、直径40cmほどの柱痕跡で、先端部の形状はかなり先細りしている。柱穴3では掘形の南によって位置で、直柱穴3では掘形の北によった位置で、直径33cm前後の柱痕跡を確認した。柱穴2については、断面を見るかぎり、柱を抜いた可能性がある。

S B 003・S H 009 (第14図、図版7)

N d 区、2 B 16・17に位置する。S B 003としたものは柱穴1と柱穴2があるが、掘形径・深さに差があり、むしろ柱穴1と組み合うのは、S I 005に重複する柱穴のほうが、規模的には釣り合うように思え



第13図 調査地南半部の調査遺構



第14図 調査地北半部の調査遺構

る。ただ限られた調査範囲のなかなので、詳しいことはわからない。柱穴1は東側でSH001と接している。掘形径は95cmで、深さは40cmになる。柱痕跡は、断面では径が38cmであった。柱穴2は、柱穴1の南東1.8mの位置にある。掘形径は68cmで、深さは20cmほどになる。断面観察で20cmほどの柱痕跡を確認した。SH009は長径62cm、深さ10cmほどで、埋土はローム粒を少し含む暗褐色土であった。

S B004・SH010・011（第14図、図版7）

Nb区、1B16・0B79に位置し、SB004・SH010はSI004の西に位置する。SH011は調査区の北西隅に位置する。SB004とした2本の柱穴は、お互いに接しており、それらが掘立柱建物を構成する柱穴とすれば、本来は別々の遺構として取り扱うべきものである。柱穴1は長径90cmほどで、深さは37cmある。断面観察では、ほぼ中央に径25cmの柱痕跡を確認した。柱穴2はほとんどが調査区外になるので全体像は不明である。SH010はSB004柱穴1の北2mほどの位置にある。長径110cm、深さ33cmで、やや掘鉢状の断面形態で、断面でも柱痕跡を確認できなかったので、はたして柱穴になるのかどうかわからない。SH011は長径80cm、深さ40cmで、径26cmの柱痕跡を確認した。単独なので建物構造はわからないが、南東方向には組み合う柱穴がないので、北から東にかけて建物の柱穴群が展開するものと思われる。

S B005・SH012・013（第14図、図版8）

Ng区、3B38に位置する。SB005としたものは、1本の柱穴で、西側半分が調査区外になる。長径80cm、深さ40cm、掘形の中斷に段がある。柱痕跡は柱穴の最深部にあり、径18cmである。調査区東側には組み合う柱穴はないので西側に展開する掘立柱建物の一部と思われる。SH012・013は長径40cm～50cm、深さ20cm～45cmである。ほかに組み合う柱穴も見あたらず、断面観察にも柱痕跡等はなかったので、柱穴かどうかわからない。

SH001～007（第14図、図版8）

Cc区、5C61・71に位置する。SH001・002・003・004・006はSH001を除いては小さな掘込みで、いずれも径30cm～40cm、深さは15cm～30cmで、掘形底面もかなり小さくなる。SH001だけはやや大きく、長径62cm、深さも58cmある。これらはとくに断面の観察をしていないために柱痕跡の有無はわからないが、掘形の形状からいえば、掘立柱建物の柱穴というよりは、竪穴住居の柱穴のようにも思える。SH005は長径96cm、深さ33cmで、南側に輪郭が張り出している。あるいはピット状の遺構が重複しているのかもしれない、断面観察では、柱痕跡は確認できなかった。SH007は長径55cm、深さ30cmで、下端が2か所にある。やはり柱痕跡は確認できなかった。

4 土坑（第14図、図版7）

SK001（第14図、図版7）

Nd区、2B17に位置する。長径138cm、短径104cmの卵形に近い土坑である。深さは15cmある。底面は比較的平坦で、掘込みもしっかりしている。埋土は黒褐色土が2層堆積していた。時期等を決められるような出土遺物はとくになかった。

SK002（第14図、図版7）

Nb区、0B78に位置し、SB008の北に位置する。長軸212cm、短径178cmの、隅丸長方形の平面形態である。深さも50cmほどあり、比較的規模の大きな土坑である。底面は平坦である。埋土は暗褐色土が主体になって堆積しており、ロームブロック・ローム粒を多く含み、あるいは埋め戻されているのかもしれない。出土遺物としては、奈良・平安時代の土器片が多かったが、埋土中位ほどから、カワラケ（91）が出

土し、図示してはいないが、ほかにも1点カワラケの破片があり、中世の土坑の可能性が強い。

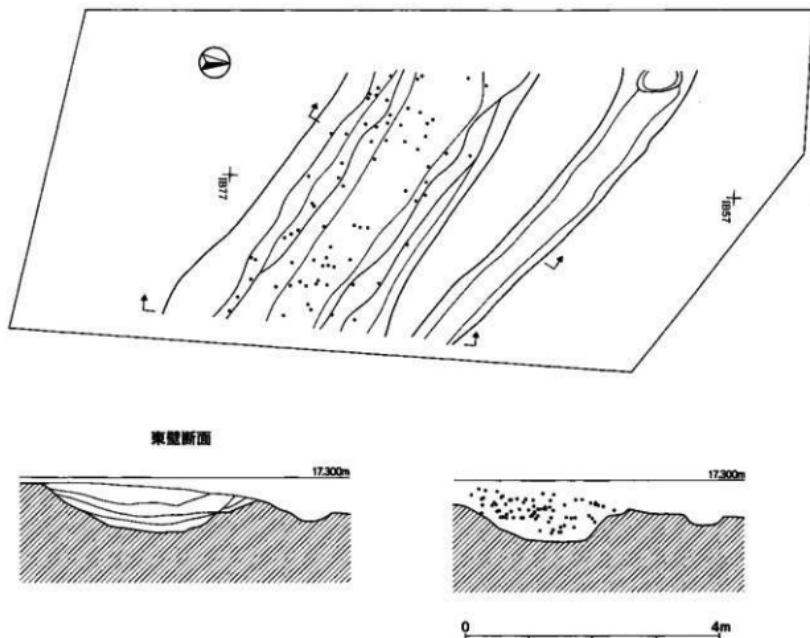
S K003 (第14図、図版7)

N b区、0 B 87に位置し、調査時の所見ではS I 008を切って構築されている。西半分は調査区外になる。長軸120cmのやや角張った円形で、深さは30cmほどになる。底面は比較的平坦である。埋土はローム粒を含む黒褐色土で、埋土の性状はS K002に似ている。時期等のわかる出土遺物はなかったが、埋土がS K002に近いことを考えれば、中世の土坑になるのかもしれない。

5 溝条造構 (第15図、図版7、第1表)

S D001・002 (第15図、図版7、第1表)

S D001・002とも、N b区を北西・南東方向に走行する。S D001は溝上端幅で2.6m、下端幅0.9m、深さは60cmほどで、底面は調査区内ではほぼ水平である。断面は浅い皿状で、壁が緩やかに外側に傾斜している。溝の両脇の立ち上がりには平坦面をもつ段があり、何回かにわたって溝が掘り直されたことをうかがわせる。断面の観察では、最終段階の溝の立ち上がりは、北側の上端が40cmほど内側によった位置にあったので、最終段階では溝の位置を南側にずらして掘り直したようである。埋土は暗褐色土を主体に堆積しており、ローム粒等をわずかに含むが、おそらく自然堆積を示しているのであろう。なお平面図中には



第15図 S D001・S D002

とくに図示はしていないが、調査時の所見では溝底面に硬化した範囲があったというので、溝掘削当初は道として使用されていたのであろうが、埋土中位以上では硬化面を確認していない。

出土遺物として図示できる資料はないが、土器類等の小片が600点ほど出土している。その内訳は下記のとおりである。

種 別	出土点数(百分比) 重量(g)	出土点数		出土点数
		壞類	甕類	
土 師 器	462点(72.8%) 1,820 g	185点	277点	内面黒色処理体部 内面黒色処理底部 未処理体部破片 未処理底部破片
				22点 4点 107点 52点
須 惠 器	163点(25.7%) 1,885 g	3点	127点	
		甕類	瓶	33点
灰釉陶器	5点(0.8%)	30 g		
中世陶器	3点(0.5%)	108 g		
瓦 類	1点(0.2%)	17 g		
合 計	634点	3,860 g		

表1 S D001出土土器組成表

出土点数としては、土師器が抜きん出ているが、重量では須恵器に甕の大型の破片が多く含まれているために、両者の出土点数と重量のあいだで逆転している。土師器の杯類にはいわゆる椀と呼ぶものも含む可能性があるが、内面黒色処理したものは土師器坏全体の14.1%をしめる。そのうち底部の形態がわかる資料では、平底の坏が1点、高台がつく椀形になると思われる資料が3点あった。黒色処理を施していない杯類のうち底部の形態がわかる資料には平底のものと高台付の2者があった、前者では回転ヘラ切り後無調整のものが4点、回転糸切り後に底面周辺を回転ヘラ削りする資料が10点あった。後者でははっきりした高台を作るもの6点と、底部を高台のように挽き出す例が4点あった。須恵器では、坏は常陸産、水田窯産もしくは南河原坂窯產と思われる破片が1点ずつあり、高台付の坏が1点あった。甕類は千葉市域産といわれるものがほとんどをしめる。灰釉陶器は猿投窯の製品に類似する胎土である。瓦としたものは、一部に布目压痕が残り、裏面には繩叩きの痕跡と思われる瘤みが残る。

S D002はS D001のすぐ北側に平行する溝で、ある段階ではS D001と一連のものであった可能性がある。上端幅70cm、下端幅40cm~50cm、深さは10cmほどで逆台形の断面形態である。形態的には、上部を削平された道路側溝とみえなくもない。そうした場合、道路側溝は通常両側にあるので、最終段階の溝の掘削によって片側の側溝が削平されたことになり、最終段階の溝よりは古い溝ということになる。

これらの溝は、既述のように東側隣接地を調査した本郷台遺跡第2次調査地点で確認されており、やや離れた西側の本郷台遺跡第1次調査地点でも確認されており、東中山台遺跡群のなかを延々と走行する溝であることをうかがわせる⁽¹⁾。

注1 岡崎文喜ほか 1983「本郷台II」船橋市遺跡調査会・本郷台遺跡第2次調査団

第2節 遺物（第16～22図、図版9～11、第2表）

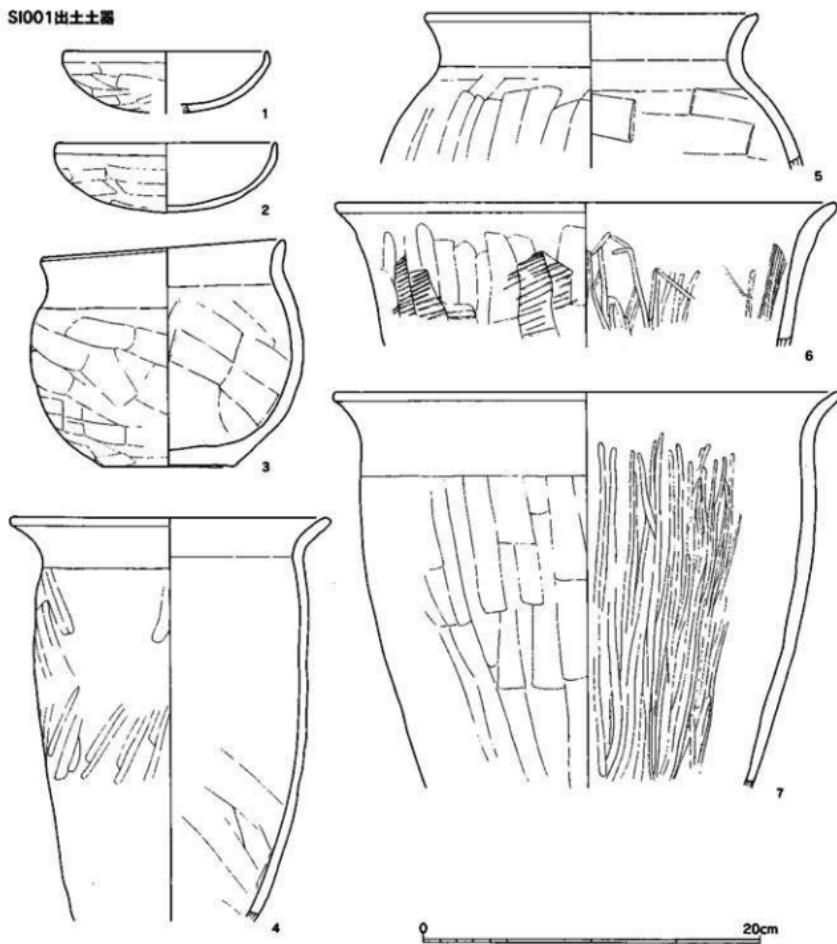
以下では、遺物の種別ごとに、遺構番号に沿って解説していくことにする。個々の遺物に付した通し番号は遺物の種別ごとに付してある。

1 土器類（第16～21図、図版9～11）

S I 001出土土器（第16図、図版9）

出土資料はすべて土師器で、破片資料のなかにも須恵器は1点もなかった。1・2は非ロクロの坏である。

S I 001出土土器



第16図 S I 001出土土器

る。口縁端部が直立か内湾気味に短く立ち上がる。体部から底面にかけてヘラ削りを施した丸底の壺である。1は約5分の1が残り、口径12.8cm、器高4.1cmで、にぶい褐色系(10YR5/4~7.5YR5/4)である。内面には斑点状に黒色粒がこびりついている。2は約5分の4が残る。口径・器高は、それぞれ推定で11.9cm・3.8cmになる。胎土は1よりも緻密である。なお小片のために図示していないが、S I 002出土の放射状暗文壺(8)とほぼ同種の破片資料が4点あった。いずれも同一個体の資料で、うち2点は埋土中層から出土したものである。細かい砂粒が多く含み、色調は明赤褐色(2.5YR5/8)である。また1点だけだが、やや大振りになる楕形の壺で、口縁部に明瞭な稜をもつ資料もあった。

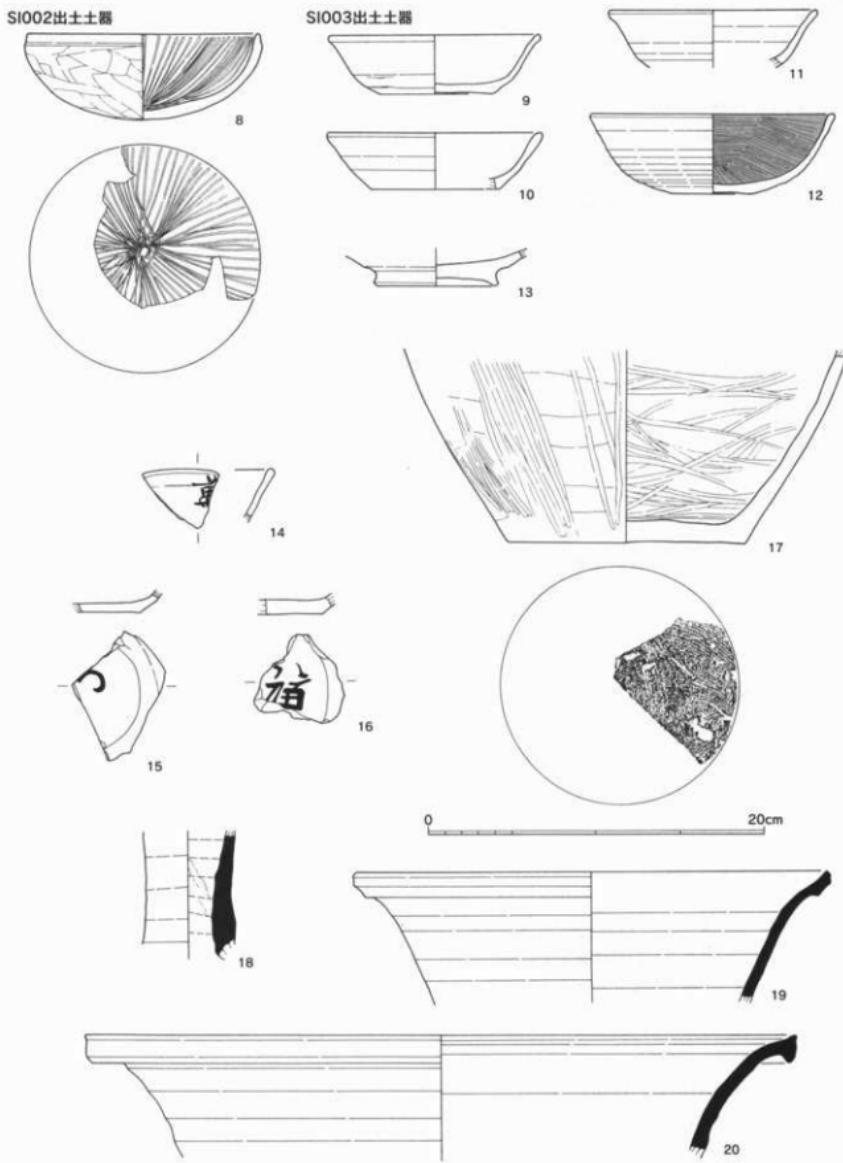
3は小型の鉢で、最大径が体部の中位にある重心が低く、肉厚な作りの鉢である。体部は球胴に近く、口縁部はやや外側に反り返る。体部外面には粗い斜め方向のヘラ削りを行っている。口径14.1cm、器高13cm、ほぼ完形である。カマド周辺と住居南隅から出土した資料が接合したものである。4・5は壺になる。4は最大径が口縁部にある長胴壺で、体部下位を欠失している。口縁部が「く」の字状に緩やかに開き、直線的に胴部に至る。体部は縱方向のヘラ削り調整し、その後に撫で付けている。口径18.4cm、体部は最大で16.0cm、現存高は24.0cmになる。胎土には大粒の長石粒が多く含む。全体に被熱によって、赤色化(2.5YR5/8)している。カマド左脇の床面から伏せた状態で出土した。体部下位を欠失しているのも、住居上面が削平されたときに失われたのであろう。5は体部に最大径がある球胴に近い壺で、肩より上の資料である。体部は縱方向のヘラ削りで調整しているが、被熱のために器面がかなり荒れており、調整痕跡は不鮮明である。口縁部近くはやや焼けている。砂粒が多く含み、酸化鉄粒を少し含む。口径は19.2cm、現存高は9.1cmになる。器体は橙色(7.5YR6/6)である。6・7は体部が逆「ハ」の字状に開き、単孔式瓶の上部の資料である、内面には縱方向の入念なミガキ調整を行い、外面に通常のヘラ削り痕跡と波板状のヘラ削り痕跡とが残る。6は砂粒が多く含み、色調は橙色(7.5YR6/6)である。推定口径29.1cm、現存高8.6cmである。7も砂粒が多く含み、外面は被熱のために赤化(5YR5/6)しているが、外面はにぶい黃橙色(10YR6/4)である。推定口径29.5cm、現存高24.5cmになる。カマド前面から出土した。なお壺と瓶の組み合わせについては、壺(4)の口径は小さすぎるので、瓶との組み合わせは、壺(5)との組み合わせが考えられる。

S I 002出土土器(第17図、図版9)

部分的な調査ということもあるが、S I 001と同様、破片資料のなかに須恵器は1点もない。図示したのは土師器壺が1点だけである。8は内面には正放射状暗文を施した、非クロロの丸底の壺である。短い口縁部が直立気味に立ち上がる。外面はヘラ削りで、器面には砂粒の剥落した痕跡が痘瘡状に残る。暗文の施文単位は、8本(筋)前後を1単位として施文しているようである。暗文の筋は最大で1mmほどの幅があり、生地に食い込んでいる。約2分の1が遺存する。口径は推定で13.7cm、器高は5.3cmである。細かい砂粒を多く含む緻密な胎土で、全体ににぶい光沢がある。色調は明赤褐色(2.5YR5/8)である。施文・調整・胎土からは、いわゆる「北武藏系」の暗文壺といわれるものに近いが、口縁端部がやや肉厚で、内湾せずに直立気味であるなど、相違点もある。なおS I 002からほかに口縁部の稜がやや不明瞭になった壺の破片が2点あった。

S I 003出土土器(第17図、図版9・10)

部分的な調査ながらも、出土資料としてはまとまっている。9~13はクロロ土師器の壺で、9~11は体部が逆「ハ」の字状に開く。9は口縁端部がやや外反する。口径12.3cm、底径6.6cm、器高3.6cmで、径高指



第17図 SI 002・SI 003出土土器

数は29、口底径比は1.8になる。底面の調整は回転糸切り後に底面と体部下端部を回転ヘラ削りしている。胎土には細かい雲母粒が多く含み、酸化鉄粒を少し含む。約4分の3が遺存している。にぶい黄橙色(2.5Y3/2)である。10は口縁端部まで直線的である。約4分の1が遺存しており、各寸法は推定で、口径13.6cm、底径7.6cm、器高3.4cmになる。最終的な調整は9と同様と思われる。胎土には細かい雲母粒を非常に多く含む。色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)である。11は口縁端部が外反する。約6分の1が遺存しており、寸法は口径が推定で12cm、器高は現存高で3.5cmになる。細かい雲母粒と長石粒を多く含み、酸化鉄粒も少し含んでいる。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)である。12は体部が丸みを帯びた椀状の坏である。体部外面にはロクロ目を段状にくっきりと残しているのが特徴である。内面は入念なミガキ調整後に黒色処理を行っているが、口縁近くには一部黒色処理が及んでいない部分がある。底面の切り離しは不明だが、切り離し後に、底面から体部下端まで回転ヘラ削りを行っている。約2分の1が遺存し、口径は推定で14.1cm、底面は椭円形で長径5.0cm、短径4.5cm、器高は4.8cmになる。外面は全体にくすんでいるが、にぶい黄橙色(10YR5/3)である。細かい砂粒と雲母粒を含む。13は高台付坏の底部の資料である。高台内部には回転糸切り痕跡がある。体部は椀状に丸みを帯びるものであろう。雲母粒と砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。

14~16は墨書き土器の細片である。14は土師器坏の口縁部に正位で1文字書いているが、右側を欠失しているので読み切るのは難しいが、候補としては「萬」がもっとも近いであろう。15は底面外側に墨書きしたものである。部分的なので、字の一部なのか記号なのか判然としない。16は底面外側のほぼ中央に「福」を墨書きしたものと思われるが、墨痕はかなり淡い。これまで近隣で出土している墨書き土器の「福」は、作りの「田」を「日」のようにくずす例が多いが、この例では比較的忠実に「田」と書いている。

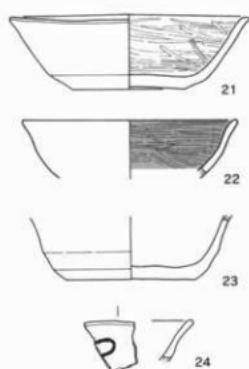
17は土師器壺の体部下半の資料である。形態的には最大径が体部の上位にある、長胴の壺と思われる。底径は推定で14.0cm、現存高は11.5cmである。底面には回転糸切り痕跡を残す。ただし調整痕跡には回転による形跡が確認できない。体部外面は横方向のヘラ削り後に縦方向の粗いミガキ調整を行っており、内面は横方向のミガキ調整を行っている。ミガキ調整を多用しているのは、いわゆる常総型壺の調整技法として共通するものの、常総型壺は一般に大粒の長石等の砂粒を多く含むのが一般的だが、17では粒径の大きい混和材はほとんど確認できない。外面は被熱のために赤化しているが、内面の色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。

18は灰釉陶器長頸瓶の頸部の資料で、体部との接合部で破損している。微黒斑のある猿投窯の製品である。19・20は壺の口縁が逆「ハ」の字状に開く、口縁部のみの須恵器である。19は折り返し口縁で、口縁端部をわずかにつまみ上げて内側に小さな稜をもつ。胎土に長石粒を多く含む、新治窯の製品である。色調は灰色(N4/)である。口径は推定で21.8cmになる。20も折り返し口縁だが、断面は扁平な台形で肉厚に作る。いわゆる千葉市域産の須恵器壺で、胎土に砂粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。器面はややざらつき、器面が痘痕状に剥落している。器面の色調は緑黒色(5G1.7/1)で、器面が剥落した部分がにぶい橙色(2.5YR6/4)になる。

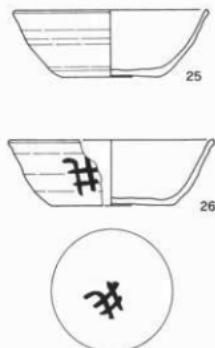
S I 004出土土器（第18図、図版9・10）

S I 004は住居の西隅を調査しただけなので、出土資料もすべてその一郭から出土した。図示した資料はいずれもその中層から出土している。ただ調査した一郭がカマドの敷設位置から離れるためか杯類が多い。図示しなかった小片の出土資料は総重量で約1.3kgあり、重量比で杯類はそのうちの64%をしめる。

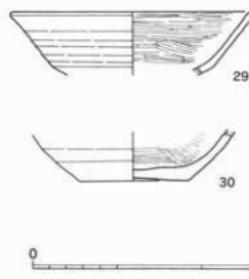
SI004出土土器



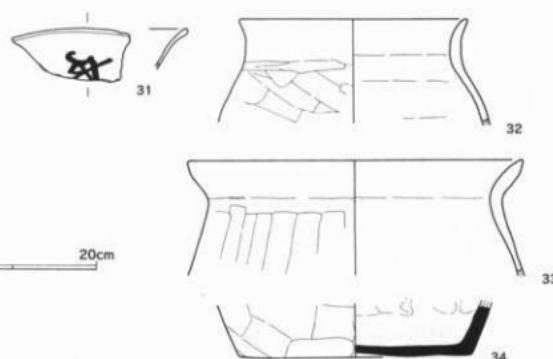
SI005出土土器



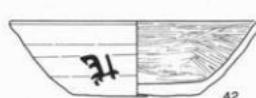
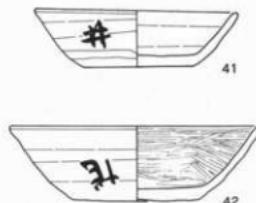
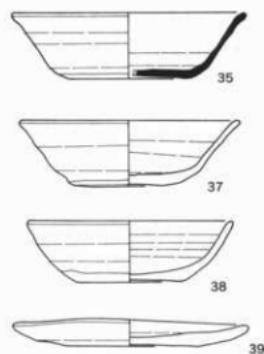
SI006出土土器



20cm



SI007出土土器



第18図 SI004・SI005・SI006・SI007出土土器

図示した資料はすべてロクロ土師器坏である。21は完形の坏で、体部が直線的に逆「ハ」の字状に開き、口縁端部がわずかに外反する。底面は回転糸切り後に、体部下半まで回転ヘラ削りを行っている。内外面に大きく黒斑状の焼成ムラがあり、それと内面のミガキ痕跡が一体になって、部分的にみると黒色処理を行っているようにもみえるが、黒光りするほどの光沢はない。全体にやや歪んでいるために、口径は13.7cm～14.3cm、底径6.4cm～6.6cm、器高は4.1cm～4.5cmになる。胎土には細かい砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。焼成ムラのない部分の色調はにぶい橙色（10YR6/4）である。22は体部内面を内面黒色処理した、体部が楕円形の坏である。胎土は20とほぼ同じである。色調はにぶい橙色（10YR5/4）である。23は底部から体部下半にかけて、部分的に遺存する資料である。底面の調整技法は20と同じである。胎土には細かい砂粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）である。なお杯類の破片資料のなかには、21と同じ調整技法を残す資料が多いが、体部下半の回転ヘラ削りを省略して、底面を高台状に作り出す例が2点あった。

24は体部外面に丸みのある墨痕を残す。なお壺類として図示できる資料はなかったが、17のように底面に回転糸切り痕を残す資料が2点あった。しかしそれらの残っている範囲には、17で確認できたようなミガキ調整は確認できなかった。須恵器については坏で小片が1点あった以外、すべて壺か瓶の破片資料である。

S I 005出土土器（第18図、図版9・10）

S I 005は、住居の約半部を調査したにもかかわらず、出土資料は非常に少ない。図示した資料はすべてロクロ土師器の坏・皿類である。25は約3分の2が残る坏である。体部がわずかに丸みをもって、逆「ハ」の字状に開く。口縁端部は少し外反している。底部の調整は、回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削りを行っている。底部・口縁部の一部に油煙煤が付着している。口径は推定で11.4cm、底径5.8cm、器高は4.0cmになる。胎土には雲母粒と多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調は灰黄褐色（10YR4/2）である。26は体部・底部外面に「井」の変異形を墨書したものである。約3分の2が遺存している、体部下半にやや丸みをもって、逆「ハ」の字状に開いている。底面は、回転糸切り後に底面の外周のみに回転ヘラ削りを行っている。口径は推定12.0cm、底径7.3cm、器高は3.9cmになる。細かい砂粒と雲母粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。27は底部・体部の外面に同筆で「花」と墨書した皿で、完形に近いが、墨書部分に欠損がある。墨痕は鮮明である。調整は回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削りを行っており、糸切り痕は底部中央にわずかに残すだけである。口径11.4cm、底径6.3cm、器高2.4cm～2.7cmになる。胎土に雲母粒を非常に多く含み、海綿骨針を少し含んでいる。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。28は体部外面の中位に墨痕を残す。部分的にしか残っていないので、判読できない。なお土師器壺類の破片には、武藏型のものと常陸型の両者があり、須恵器の破片には坏・蓋・壺などが8点あった。

S I 006出土土器（第18図）

29は体部が6分の1ほど残る土師器坏である。内面には横方向のミガキ調整を行っている。推定口径は14.1cmになる。胎土には雲母粒と細かい砂粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい橙色（10YR4/7）である。30は底部の残る土師器坏である。回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削り調整を行って、糸切り痕をほとんど残さない。内面には丁寧な横方向のミガキ調整を施している。底径6.3cmになる。胎土は29と同じである。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）である。なお破片資料のなかには、底面から

底部外周にかけて回転ヘラ削りを行うものに加えて、高台部が「ハ」の字状に開くものが1点あった。31は体部外面に横位で「成」を墨書した土師器坏である。32は小型の壺体部の上半部が残る資料である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、体部は球胴になる。口縁部はヨコナデし、体部に斜め方向のヘラ削りを行っている。口径は推定で13.3cmになる。胎土には細かい雲母粒・砂粒を少し含む。色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)である。33は体部上半の資料である。ほってりした口縁部が逆「ハ」の字状に開き、体部は球胴に近い長胴の壺と思われる。34は須恵器の壺底部である。外面はヘラ削りを行っている。白色粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。器面の色調は暗青灰色(10Y4/1)で、芯の部分では明赤褐色(2.5Y5/6)になる。千葉市中原窯等で典型的な、広口壺の壺になるであろう。なお破片資料のなかに、おそらく34と同一個体になる、胎土・色調が同じ頸部の破片が1点ある。口縁部が逆「ハ」の字状に開いて高く立ち上がり、体部には平行タタキ目を残す。

S I 007出土土器（第18図、図版9・10）

住居の約3分の1を調査したにもかかわらず、出土遺物はさほど多くない。35・36は須恵器である。35は比較的大型な杯で、口縁端部がわずかに外反する。約2分の1が遺存しており、口径・底径は推定で、それぞれ13.6cm・7.0cm、器高は3.9cmで、口底径比1.9、径高指数は29になる。底面から体部下半にかけて、手持ちヘラ削りを行っている。胎土には細かい白色鉱物の砂粒を多く含み、酸化鉄粒・海綿骨針を少し含む。色調は器面が暗青灰色(5B3/1)で、芯は橙色(2.5YR6/6)になる。千葉市域諸窯の製品である。36は口頸部が逆「ハ」の字状に大きく開く、折り返し口縁の壺口頸部の資料で、口縁端部は短くつまみ上げている。胎土には大小の長石粒をやや多く含み、海綿骨針を少し含む。色調は青灰色(5B5/1)から灰色(N4/)で、硬質に焼き上がっている。新治窯の製品と思われる。

37~42は土師器で、いずれも調整は回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削りして、底面中央に回転糸切り痕を残す例(37・38・41・42)と残さない例(39・40)がある。37は体部が直線的に逆「ハ」の字状に開いて、口縁端部がわずかに反り返る、完形の坏である。口径12.6cm、底径6.3cm、器高3.9cmで、径高指数は31になる。内外面の一部に油煙煤が付着している。胎土には細かい砂粒・雲母粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。38は体部が内湾気味に立ち上がる、完形の坏である。内面にはロクロ目が顯著に残る。口径11.9cm、底径6.1cm、器高3.7cmで、径高指数は31である。39は扁平な皿で、約3分の1を欠失している。底部の調整は37・38と同様、回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削り調整を行っている。内面の一部には油煙煤が付着している。口径13.4cm、底径7.5cm、器高は1.4cm前後である。胎土には白色砂粒と雲母粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)から橙色(5YR6/6)である。なお37・38・39はカマド前面から出土したものである。

40~42は墨書き土器である。40は底面に「酒坏」の墨書きがある。やや深みのある坏で、約5分の1を欠損している。体部は直線的に逆「ハ」の字状に開く。口径11.8cm、底径5.7cm、器高4.2cmで、径高指数は36になる。白色砂粒と雲母粒を多く含み、色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。住居の中央より、41と重なって出土した。41は体部側面に正位で「井」の墨書きがある。墨痕はかなり淡くなっている。ほぼ完形で、体部がほぼ直線的に逆「ハ」の字状に開く。口径11.8cm、底径6.3cm、器高3.2cm~3.5cmで、径高指数は28になる。白色砂粒と雲母粒をやや多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調は橙色(5YR6/6)である。42は大振りの坏で、体部をわずかに欠いている。墨書きは体部外面に倒位で、欠損のために一部欠画しているが「花」と墨書きしている。墨痕はかなり淡い。内面は入念なミガキ調整を施し、器面が密に締まってい

る。口径14.8cm、底径7.4cm、器高4.5cmで、径高指数は30、口底径比は2.0になり、ちょうど37の坏を一回り大きくした大きさになる。白色砂粒と雲母粒をやや多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい橙色(5YR6/4)である。カマド内から出土した。

破片資料としては、須恵器には常陸産の坏が2点と千葉市域産の甕類が9点あった。また土師器では武藏産の甕の破片資料が目立った。

S I 008出土土器（第19図、図版10）

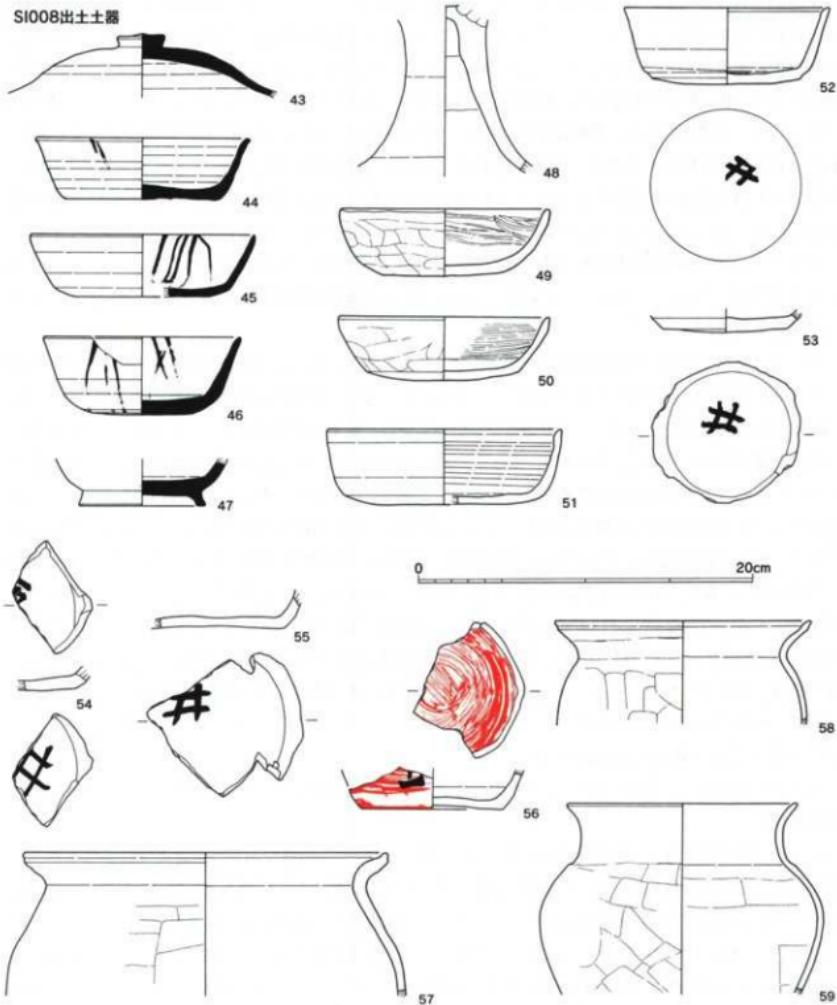
住居全体に遺物が散乱した状態で出土しているが、カマド周辺ではさほど遺物は出土していない。

43~47が須恵器である。43は扁平な擬宝珠形のつまみをもち、中心部はさほど突出しない坏蓋である。周縁部を欠くが、それでも推定の現存径で15cmあるので、やや大振りの部類に属するであろう。胎土には細かい砂粒を多く含む。灰白色(2.5Y7/1)で、焼き上がりはやや軟質である。生産窯については不明である。44~46が火拂痕のある、無台坏である。44は底部からほほ直線的に体部が逆「ハ」の字状に開く。口縁端部の外側がわずかに突堤状になる。約8分の1遺存している。底面は回転ヘラ切り後、ほとんど無調整である。胎土には細かい白色砂粒をやや多く含み、海総骨針を少し含んでいる。各寸法は推定で、口径12.4cm、底径9.4cm、器高3.6cmで、径高指数は29、口底径比は3.4になる。灰色(5Y6/1)で、胎土のキメは粗い。南河原坂窯の製品の可能性がある。45~47は永田・不入窯の製品である。45は約3分の1遺存する、やや薄手の坏である。体部はほほ直線的に逆「ハ」の字状に開く。底面は回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削りを行っている。糸切り痕は残していない。各寸法は推定で、口径13.2cm、底径7.6cm、器高3.7cmで、径高指数は28、口底径比は3.6になる。色調は灰色(10Y6/1)である。46は体部下半にやや丸みをもちながら、逆「ハ」の字状に開く。約3分の1が遺存する。底面は回転糸切り後に体部下半まで回転ヘラ削りを行っており、底面中央に小さく回転糸切り痕が残る。器高にたいして口径が小さく、口径は推定で11.5cm、底径6.0cm、器高4.5cm、径高指数は39、口底径比は1.9になる。色調は黄灰色(2.5Y5/1)である。47は高台付坏の下半が残る資料である。高台内部に回転糸切り痕を残す。比較的硬質で、細かい白色砂粒を含み、海総骨針と黒色粒を少し含む。色調は灰色(N4/)である。なお図示した資料はいずれも県内産の須恵器だが、破片資料では新治産の坏がかなりの部分をしめている。底面の調整痕跡のわかるものでは、回転ヘラ削り後無調整のものと、手持ちヘラ削りしたものとがあり、いずれも体部下半を回転ヘラ削りしている。また武藏産の須恵器杯の破片資料も数点ある。

48~59はロクロ土師器である。48はロクロ成形のいわゆる高盤類の脚部で、坏部中央がわずかに残る。内外面をロクロ調整している。現存高は10.2cmである。器面と芯がにぶい黄橙色(10YR7/2~7/3)で、内面は橙色(5YR6/6)である。細かい白色砂粒を少し含む。破片資料のなかには、須恵器で透し孔のある新治産の高盤脚部の資料が1点ある。49~50は、いずれも口縁部をヨコナデし、底部から外面までを持ちヘラ削りで調整し、内面に入念なミガキ調整を行っているために、成形痕跡は残していない。しかし底部内面にわずかだが、ロクロ目と考えられる同心円状のふくらみが土手状に残り、ロクロ成形の痕跡をとどめている。49は3分の1を欠失している。体部と底面の境は明瞭である。口径は推定で12.2cm、底径4.0前後、器高7.2cmになる。胎土には長石粒・石英粒・酸化鉄粒を含む。色調は明褐色(7.5YR5/6)である。50は体部が8分の1ほどと底面がほほ全部遺存する。内面の体部立ち上がり付近に、同心円状のナデ痕跡を残す。口径は推定で12.5cm、底径は9.0前後、器高3.8cmである。白色砂粒を非常に多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調は外面が黒ずみ、内面は灰褐色(7.5YR4/2)である。

51～56は箱形のロクロ土師器で、51・52・54～56が静止糸切り離し後に、体部下半を回転ヘラ削りし、削りは一部体部下半にまで及ぶ例もある。53は回転ヘラ削りが全面に及んでいるために、底面に切り離し痕跡は残していないが、51などと同技法で制作された可能性がある。51は内面にロクロ目を強く残し、外面にはナデ調整を行っている。約8分の1が遺存している。口径・底径は推定で、それぞれ13.8cm・12.8cmで、器高は4.5cmになる。細かい砂粒を多く含み、海綿骨針・酸化鉄粒・雲母粒を少し含む。色調はに

SI008出土土器



第19図 S I 008出土土器

ぶい褐色（7.5YR5/3）からにぶい橙色（7.5YR6/4）である。52は体部を約3分の2欠損している。底部内面にロクロ目を残す。52は底部外面の中央に「井」の墨書がある。墨痕はかなり擦れて、一部欠画している。口径は推定で12.1cm、底径8.8cm、器高4.6cmで、径高指数は38で、口底径比は1.4になる。粒径の大きい砂粒をやや多く含み、酸化鉄粒・雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調はにぶい橙色（7.5YR6/4）から橙色（7.5YR6/6）である。

53も底部外面中央に「井」の墨書がある。墨痕はかなり淡くなっている。底径は7.8cmである。白色砂粒・酸化鉄粒をやや多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は橙色（7.5YR6/6）である。54は底部の内外面に墨書があり、外面には「井」、内面には「西」あるいは「酉」の右上半分を文字の一部とする残画である。粗い砂粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調は橙色（7.5YR7/6）である。55も底部外面中央に「井」の墨書がある。墨痕はかなり淡い。粗い砂粒を多く含み、酸化鉄粒・海綿骨針を少し含む。色調は橙色（7.5YR6/6）である。56は体部外面に墨痕が一部残っている。「山」の下半分のような残画である。なお内外面は赤色塗彩されており、塗彩痕跡は部分的に筆先が割れて、細い筋状に残り、ロクロ目の谷には濁んでいる部分もある。塗彩は墨書後に行われている。底径は推定で8.5cmである。胎土には粗い砂粒を多く含み、細かい酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）である。胎土・色調は48にかなり似通っている。なお49～55には明瞭な赤色塗彩痕跡は視認できないが、塗彩痕跡が剥落してしまった可能性が強い。

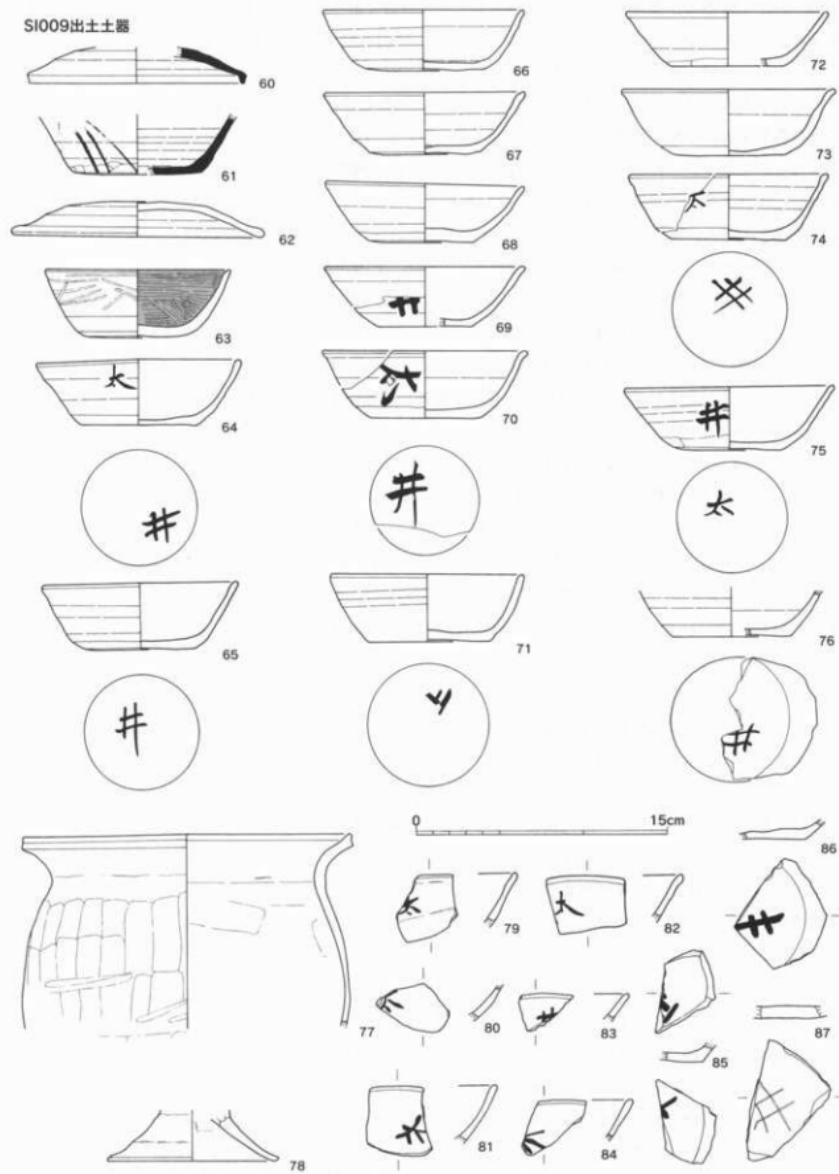
57～59は壺類である。57は口縁部が「く」の字状に短く開き、体部は球胴型になる。口縁端部をわずかにつまみ上げている。8分の1ほどしか残っていないが、器形・胎土から常総型の壺になるであろう。口縁部には帯状にカマド材のようなものがこびりついている。胎土には粒径の大きい石英粒・長石粒を多く含む。色調はにぶい赤褐色（5YR4/3）である。58・59は口径が15cm前後の小型の壺類で、作りは薄手である。いずれも上半部の資料のためか、はっきりした被熱痕跡は視認できない。58は口縁部が「く」の字状に開き、口縁端部が少し内側に立ち上がる。口縁部外面に2条の粘土紐接合痕を残す。推定口径15.0cmである。胎土には白色砂粒を多く含み、酸化鉄粒・雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）である。59は口縁部が湾曲しながら外反し、胴部はかなり丸みを帯びる。内面はヘラナデで仕上げてある。口径は推定で13.4cmになる。胎土には細かい白色砂粒と雲母粒を少し含む。色調は黄灰色（5YR4/3）からにぶい黄褐色（10YR5/3）である。なお破片資料のなかに、台付壺脚部の資料が数点あり、被熱痕跡を残さないものもある。58・59は小型で薄手に作られており、とくに59は内面の調整痕跡から、台付壺の壺部になる可能性もある。

S I 009出土土器（第20図、図版10・11）

住居の半分程度しか調査していないもかわらず、出土点数は非常に多く、また墨書土器の点数も比較的多かった。

60・61は須恵器である。60は縁のかかりが低い、推定口径12.6cmの蓋である。現存高は2.2cmになる。肩部を回転ヘラ削り調整している。やや粗い砂粒を多く含み、軟質である。色調は灰白色（5Y7/2）で、永田・不入窯の製品である。61は体部から底面の外面に火棒痕が残る壺である。底面の切り離しは回転ヘラ切りで、その後に底面から体部下端にかけて手持ちヘラ削りで調整している。底径は推定で7.6cmである。胎土には細かい白色砂粒と雲母粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調は黄灰色（2.5Y5/1）で、火棒痕も黒色系ではなく、にぶい赤褐色（2.5Y5/3）に発色している。常陸産である。

SI009出土土器



第20図 SI009出土土器

62～87が土師器で、甕類を除いてはすべてロクロ土師器である。62はつまみのない蓋である。約4分の1遺存する。肩部から上部を回転ヘラ削りしている。推定口径15.0cm、器高2.1cmになる。胎土には細かい雲母粒と酸化鉄粒を多く含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

63～76は無台の坏である。個体差はあるものの、いずれも体部はほぼ直線的に逆「ハ」の字状に開く。径高指数35を境に、やや箱形に近いもの(63・65・71)と口径にたいして器高が低くなるもの(64・66～70・72～75)との、二者がある。底面の調整は、調整痕跡を明瞭に残すものでは、いずれも回転糸切り後、底面から体部下端まで回転ヘラ削りしている。

63は口径に比べて器高が高い坏である。約4分の3が遺存している。器面の内外をミガキ調整しており、内面はとくに密で、ミガキ調整後に黒色処理をしている。口径10.8cm、底径5.9cm、器高4.1cmで、口径指数は38、口底径比は1.8になる。胎土には白色砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は灰黄褐色(10YR5/2)である。64は体部がやや湾曲する。口縁部の一部を欠く。体部外面に正位で「太」、底面に「井」の墨書がある。いずれも墨痕は淡い。口径11.9cm、底径6.8cm、器高3.8cmで、口径指数は32、口底径比は1.8になる。胎土は砂粒・雲母粒をやや多く含み、海綿骨針・酸化鉄粒を少し含む。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。65は体部を約3分の1欠失している。底部外面に「井」の墨書がある。口径11.3cm、底径6.6cm、器高4.0cmで、口径指数は35、口底径比は1.7とやや小さい。胎土に雲母粒を非常に多く含み、細かい白色砂粒・海綿骨針を少し含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

66は底面に墨痕らしい痕跡があるが、駆逐不能である。約2分の1が遺存する。口径11.8cm、底径7.0cm、器高3.7cmで、口径指数は31、口底径比は1.7と、65と同様にやや小さい。胎土は雲母粒・砂粒を非常に多く含み、海綿骨針を少し含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。67は約2分の1遺存する。口径は推定で11.6cm、底径6.6cm、器高3.8cmで、口径指数は33、口底径比は1.8になる。胎土には雲母粒と海綿骨針を少し含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。68は底部内面中央のロクロ目の中心がやや突出している。約2分の1が遺存する。口径11.9cm、底径6.3cm、器高は3.4cm～3.6cmで、口径指数は29、口底径比は1.9になる。胎土は雲母粒を多く含み、海綿骨針を少し含む。色調はにぶい黄橙色(10YR6/3)である。69は約5分の1が遺存する。体部外面に「井」の下半部の墨書があるが、墨痕はかなり淡くなっている。各寸法は推定で、口径11.8cm、底径5.6cm、器高は3.6cmで、口径指数は31、口底径比は2.1になる。胎土は雲母粒を多く含み、海綿骨針・酸化鉄粒を少し含む。色調は橙色(7.5YR6/6)である。70は体部にやや丸みがあり、口縁端部がわずかに外反する。約3分の1が遺存する。体部外面に横位で「太」、底面に「井」の墨書がある。筆跡からは筆の出入りをしっかりと押さえており、手慣れた運筆をうかがわせる。口径は推定で12.0cm、底径6.5cm、器高は4.0cmで、口径指数は33、口底径比は1.8になる。胎土は細かい砂粒と雲母粒を少し含む。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。

71は約5分の1を欠損する。被焼しており、器面がざらついている。底面に「上」の墨書がある。墨痕はやや不鮮明である。口径11.4cm、底径7.2cm、器高は4.1cmで、口径指数は36、口底径比は1.6で、やや箱形に近い。胎土は細かい砂粒を非常に多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は橙色(5YR6/6)から暗灰黄色(2.5Y5/2)である。72は約5分の1が遺存する。体部下半と底面外周を手持ちヘラ削りで調整している。口径は推定で11.8cm、底径6.7cm、器高は3.3cmで、口径指数は28、口底径比は1.8になる。胎土にはやや粗い砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。73は体部にやや丸みをもち、口縁端部が少し外反する。約3分の1が遺存する。口径は推定で12.5cm、底径は6.5cm、器高は4.1cm、口径指数は32、

口底径比は1.9になる。胎土には雲母粒を多く含み、海綿骨針・酸化鉄粒を少し含む。74は3分の1を欠損する。体部外面に「井」の下半部の墨書がある。口径・底径は推定で、それぞれ11.8cm・5.6cmになり、器高は3.6cmである。口径指数は31、口底径比は2.1になる。胎土には雲母粒を多く含み、白色砂粒・海綿骨針を少し含む。色調は橙色（7.5YR6/4）である。75は4分の1を欠損している。体部外面に正位で「井」、底面に「太」の墨書がある。墨痕はやや淡い。口径12.2cm、底径6.6cm、器高は3.7cm～3.9cmで、口径指数は31、口底径比は1.8になる。胎土は細かい砂粒を多く含み、雲母粒・海綿骨針を少し含む。色調は橙色（5YR7/6）である。76は底面に「井」の墨書がある。墨痕はやや淡い。胎土には雲母粒を多く含み、白色砂粒・海綿骨針を少し含む。

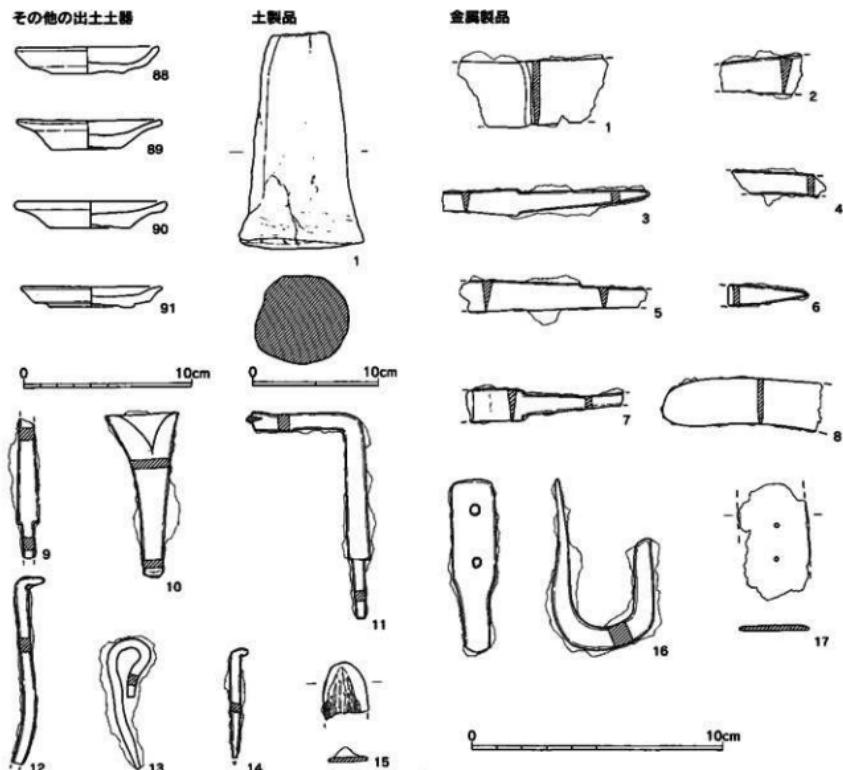
77は口縁部が緩やかに「く」の字状に開き、口縁端部をつまみ上げる、武藏型の甕である。体部は縱方向のヘラ削りを行って、かなり薄手に仕上げている。口径19.3cmで、現存高は11.6cmである。白色砂粒を多く含み、細かい石英粒を少し含む。色調は赤褐色（5YR4/6）である。78は台付甕の脚部が残る資料である。全体に被熱しているが、器面はさほど荒れていない。底径は10.1cmである。色調は褐灰色（10YR4/1）である。

79～86は墨書き器（土師器坏）の小片である。79～82・84は体部外面に正位で「太」の墨書がある。83は墨痕が「草冠」状に残る。「井」の上半部か、「花」の冠部分であろう。85は底部の内外面に墨痕を残す。墨痕も淡く、部分的なので駆説できないが、いずれも「井」の可能性がある。86は底部外面に墨書きがあるが、墨痕が淡く、糸切り痕とも重なり判然としない。あるいは「井」の一部を残している資料かもしれない。87は底部外面に、先端が釘状になったもので、焼成後に「井」を刻書したものである。

なお出土した破片資料だけでもテン箱（54cm×33cm×15cm）1箱分があり、図示した以外の資料を端的に網羅することは難しいが、気づいた点をいくつか記しておく。土師器坏では内面を黒色処理したものが相当数出土しているが、明らかに高台が付く例はなかった。底面の調整は基本的には、回転糸切り後に底面から体部下半にかけて回転ヘラ削りを行っているが、1点だけ静止糸切り後に回転ヘラ削りを行っているものがあった。土師器ではほかに皿の破片が数点あった。須恵器では、杯・蓋類がごくわずかで、甕・瓶等の大型品の破片が多い。その多くが千葉市域産で、常陸産と判断できるものはほとんどない。

その他の土器（第21図、図版11）

中世以降のカワラケが数点出土している。88・89はS I 008から出土したものである。88は体部が湾曲しながら立ち上がる。約3分の2遺存している。底面は回転糸切り後、無調整である。口径・底径は推定でそれぞれ、8.2cm・4.2cm、器高は1.6cmである。細かい砂粒を少し含む。色調はにぶい赤褐色（5YR4/4）である。器面がやや荒れており、あるいは被熱しているのかもしれない。89は体部が反り返る皿状のカワラケである。約4分の1を欠損している。底面は静止糸切り後無調整である。口径8.4cm、底径4.2cm、器高は1.9cmである。細かい砂粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。器面がややざらついている。色調は橙色（5YR6/6）である。90は形態としては89に似る。体部をわずかに欠損する。底面は回転糸切り後無調整である。口径8.8cm、底径4.8cm、器高は1.6cmである。細かい砂粒を多く含み、雲母粒を少し含む。色調はにぶい黄橙色（10YR7/3）である。S I 001から出土した。91は体部と口縁部の境に稜をもつ、皿形のカワラケである。約3分の1遺存している。底面は回転糸切り後無調整である。各寸法は推定で、口径8.2cm、底径5.0cm、器高は1.2cmである。細かい砂粒を多く含み、酸化鉄粒を少し含む。色調は橙色（5YR6/6）である。S K 002から出土した。



第21図 その他の出土土器・土製品・金属製品

2 土製品（第21図、図版11）

土製品としては1点だけ図示した。1は完形で、象の足状の支脚である。全体に被熱痕跡が顕著で、上半部は灰白色(7.5Y8/1)に変色している。全長17.3cmで、上面はわずかに窪んでいる。重量は1.26kgある。S I 001から出土したものである。なおS I 008からは、一部に面取りを残す、レンガ状の製品が出土している。支脚かカマドの袖の芯としたものであろう。

3 金属製品（第21図、図版11）

金属製品はすべて鉄製品で、S I 001 (7・17), S I 003 (1・2・4・5・12・13・16・17), S I 004 (6・10), S I 005 (9), S I 006 (8), S I 008 (14), S I 009 (3・11・15) から出土しており、S I 003からやまとまって出土している（括弧内は挿図掲載番号）。

1は刃部を作り出しているので、鎌もしくは刀類の刃部の破片と思われる。重量は20.2gである。2～7は刀子の破片資料である。2は刃部の一部で、両端は折損しており、鏽に覆われている。重量は6.74gである。3は刃部の一部から茎尻にかけて遺存している。関は背と刃の両方につく両関である。刃部の一

部を折損しているが、これは調査時の破損による。茎部は完存しており、一部に木質が付着する。重量は9.06 gである。4は茎部の一部と思われる。重量は3.95 gである。5は両端を折損し、鏑に覆われている。背に間ともみえる段差がある。間とすれば、茎部が一部遺存していることになるが、刃自体は連続しているようにもみえるので、遺存しているすべてが刃部になる可能性もある。重量は11.14 gである。6は茎尻と考えられる二等辺三角形の破片である。重量は1.60 gである。7は刃部と茎部の一部が残り、間は両側である。遺存している刃部の途中で、約45度の角度で折れ曲がっている。重量は8.81 gである。

8は鏑の先端部が残る資料である。身幅は1.8cmほどになる。重量は13.0 gである。

9は上下に端面がある。上部は断面が正方形に近く、下部はやや長方形で、その境に間状の段差がある。工具か鐵の一部と思われる。重量は9.36 gである。10は形態的には雁股鐵の先端部にみえる資料である。X線透過写真では、「Y」の字状に先割れているのを確認できる。ただ割れの付け根部分は鋭角になってしまっており、雁股鐵と断定するのは難しい。重量は17.48 gである。11は断面方形の棒状鐵製品で、中途では直角に折れ曲がる製品である。形状から、クルル鉤の解錠部の一部と軸部、そして下端部には段差があるので、それ以下を柄部とすれば、軸部を完全に残すクルル鉤の一部ということになる⁽¹⁾。その場合の軸部長は5.2cmである。重量は22.82 gである。同形態の鐵製品は印西市鳴神山遺跡193号穴住居出土などにある⁽²⁾。

12~14は棒状の製品で、12・14は形態的には方頭の折釘になるであろう。12は下端部でやや損壊している。先端部を欠損するが、現存長は7.4cmになる。重量は11.00 gである。13は逆「U」の字状に折れ曲がっている。下端部がやや尖状になっている。頭部の形状は不明である。重量は9.30 gである。14は先端部をわずかに欠損している。現存長は4.1cmである。重量は2.55 gである。

15は尻が「U」の字形をした、薄い板状の製品である。片面に木質が厚く残る。重量は3.00 gである。

16は「し」の字状に折れ曲がった製品である。「し」の書き出しに当たる部分はヘラ状に薄く、幅広で、それ以外は断面方形である。ヘラ状部分の中央部には径3mm~4mmほどの孔を2か所、X線透過写真で確認できる。これらを釘穴とみなせば、壁板等に固定したフック状の金具とも考えられなくもない。ただその場合、下側の釘穴の位置が問題になる。つまり折れ曲がった部分が邪魔をして、脇から斜めに釘を打たない限り、釘を打つことは難しそうである。現状では用途不明としておきたい。重量は30.07 gである。17は厚み1mmほどの板状の製品で、X線透過写真で中央部に縦方向に2か所の小さな孔を確認できる。座金具の一種かもしれない。重量は5.81 gである。

なおS I 001からは鐵滓が出土しており、取り上げたなかには土に鐵分が浸透したものなどがあり、それらを除いて明らかに鐵滓と思われるものは64点で、総重量で241.11 gあった。そのうち磁着力0のものが大半をしめ、50点で総重量131.60 g、重量比で全体の55%をしめる。磁着力のあるものでは、強いものは2点で131.6 g、中程度のものも2点で47.90 g、低いものがもっと多く、10点で37.41 gであった。これらを大局的にみれば、個体重量が重いものほど、磁着力が強いという傾向がある。個体が小さいものほど、磁着力を喪失しやすい環境下にあるのも容易に想像できるので、本来は計測結果以上の磁着力はあったと考えておいたほうがよいかもしれない。S I 001からは鍛造片等は出土していないが、鐵滓の出土状況や遺構の被熱痕跡から、出入り口ピット西側でみつかった、床面が焼けて硬化していた範囲を小鐵治の炉床と考えてよいだろう。

4 自然遺物 (第22・23図、第2表)

S I 002に住居内貝層があり、攪乱されている部分をよけて、貝の堆積状況が良好と思われる部分を、30cm×40cmの範囲で、混土貝層の下面から上に向かって、5cmごとに5カット採取し、最終カット面だけが3cmほどの厚みになった。総サンプル量は47.1ℓで、総重量43,480gである。採取したサンプルは、9.52mm、4mm、2mm、1mmメッシュの試験フルイによって水洗分離し、その後に貝種の選別、計測、集計を行った。その結果、採取した貝類は総量で14.7ℓ、総重量では5,650gになった。なおそのほかに微量の魚骨類があった。

集計の結果、カット面ごとの内容にさほど違いがなかったので、ここではそれらを集計して扱うことにする。

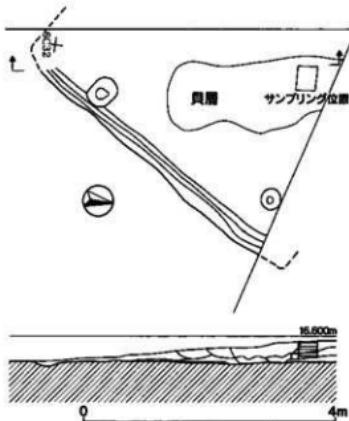
同定した貝種は、下表のとおり2綱10種になった。

綱 目	科	和名	学名
腹足綱 前鰐亜綱 新紐舌目ウミニナ科	ウミニナ科種不明	Potamididae gen.&sp.indet	
二枚貝綱 真形亜綱 ウグイスガイ目 イタボガキ科	マガキ	Crassostrea gigas (Thunberg, 1793)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 マルスダレガイ科	ハマグリ (蛤)	Meretrix lusoria (Roeding, 1798)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 マルスダレガイ科	オキシジミ	Cyclina sinensis (Gmelin, 1791)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 マルスダレガイ科	カガミガイ (鏡貝)	Dosinia japonica (Reeve, 1850)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 バカガイ科	シオフキガイ (潮吹)	Mactra veneriformis (Reeve, 1859)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 バカガイ科	バカガイ (馬鹿貝)	Mactra chinensis (Philip, 1846)	
翼形亜綱 フネガイ目 フネガイ科	サルボウ (猿頬)	Scapharca subcrenata (Lischke, 1869)	
翼形亜綱 フネガイ目 フネガイ科	ハイガイ (灰貝)	Anadara granosa (Linnaeus, 1758)	
異歯亜綱 マルスダレガイ目 マテガイ科	マテガイ	Solen strictus (Gould, 1861)	

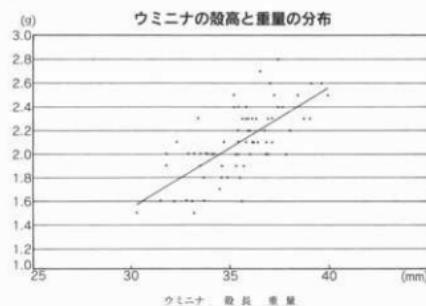
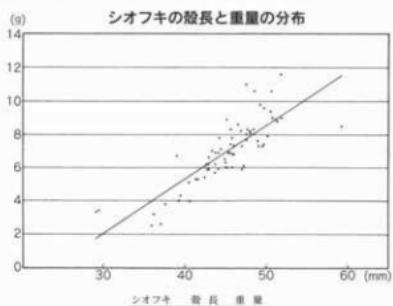
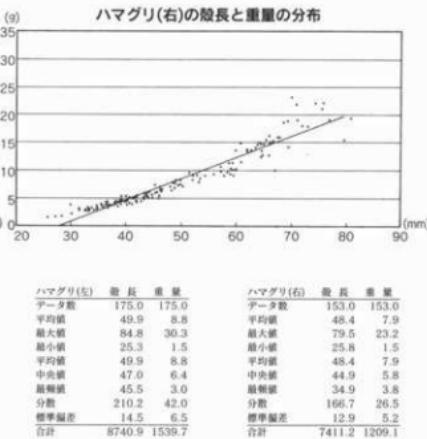
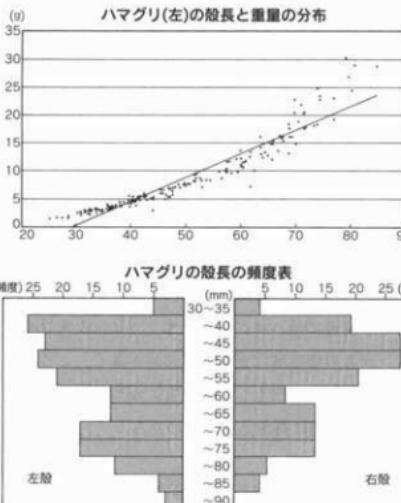
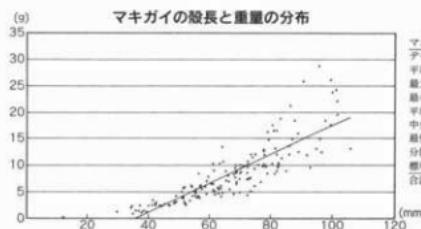
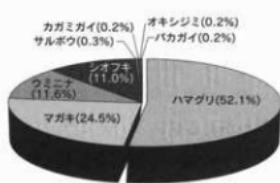
第2表 貝類種名一覧

出土した貝種のなかでもっとも多かったのは、内湾の砂泥底に棲息するハマグリである。次に多かったのはマガキになる。ただ両者の発生率を比較すると、ハマグリのほうが80%ほどマガキより少ないので、食という観点からいえば、ハマグリはマガキよりも個体数以上の内容で食に供されたといえよう。

ハマグリの総標本数は328(左殻175、右殻153)で、殻長が3cm~5cmの小型なものと、7cm前後のやや大型の部類が出土している。この傾向をヒストグラムでみると、殻の左右に関係なく殻長5.5cm~6.0cmのあいだを谷として、その両側に山があり、いわゆる双峰型の分布を示している。ただ総体的には5cm以下の小型のものが優勢である。これらから今回の標本資料は、調理されたものがそのまま発見されたことをうかがわせる。なおハマグリの殻表には光沢があり、ほとんどチョーク化していないので、煮沸して調理されたものと思われる。



第22図 S I 002貝層堆積状況



第23図 貝類組成図

マガキの標本数は左殻が103、右殻が51で、左右の個数比ではおよそ2:1になる。これは右殻が左殻に比べて破損しやすいことに起因している。したがって個体数としては左殻の数が優先することになる。マガキの標本の中には、殻長1cm~3cmのものもかなりあるが、これらはマガキ同士で付着し、稚貝・幼貝が剥落したものである。今回とくに殻頂部分を観察したわけではないが、マガキ同士が付着した痕跡はかなり目に付いたので、湾奥の砂礫底にカキ礁が発達していた様子をうかがえる痕跡といえよう。

ウミニナ類は現代でこそ大きく減少しているが、かつては干潟生物を代表する極めて普通な巻貝で、内湾の泥の干潟に群生し、東京湾の湾奥干潟でも1950年代まで豊富なウミニナ類が存在した。しかし今回の標本が属す科名までは同定できなかった。標本数は73個体あった。殻高の平均は35mmで、もっとも小さいものでも30mmなので、じゅうぶん成長したものを探取したようである。

シオフキは、潮干狩りではアサリと混じってよく採れる二枚貝だが、今回の資料の中にはアサリはなかった。シオフキの標本数は69（左殻35、右殻34）で、殻長の平均値が45.1mmなので、比較的成長したものを中心探取したのであろう。

そのほかにサルボウ・カガミガイ・オキシジミ・バカガイなどがあったが、全体にしめる量は少ない。カガミガイ・オキシジミは食用ではあるが、いずれも美味ではないといわれているものである。とくにカガミガイは、ゴムを噛んでいるような食感といわれる。

なお破碎されて計測できなかった貝種として、湾の干潟に棲息するマテガイがある。総重量は30.3gである。殻幅の残る資料では、その幅が1cm前後のものが多かったので、成貝を探取していたようである。

これらの貝種は、内湾砂底種と湾奥干潟種にわけられる。前者にはハマグリ・カガミガイ・シオフキなどがあり、後者にはマガキ・オキシジミなどが含まれる。両者の棲息域は重複する部分が多く、こうした環境こそが、かつての東京湾奥部の地形的環境を反映している。今回出土した貝類も、かつて調査地の位置する台地の眼下に広がっていた遠浅の海岸で採取され、調査地内に持ち込まれたのだろう。

注1 合田芳正 1998『古代の鏡』ニュー・サイエンス社

2 萩原恭一 2000『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XIV—鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡』(財)千葉県文化財センター

第3章 まとめ

第1節 出土土器について

今回は路線調査ということもあって、既述のように遺構全体を調査できたものはほとんどなかった。それでも奈良・平安時代を中心とする堅穴住居9軒、掘立柱建物4棟以上、溝状遺構2条、そして中世に帰属する可能性のある土坑2基などの存在が明らかとなり、東中山台遺跡群における遺構密度の濃さを改めて認識させる結果となった。また遺構の大半が奈良・平安時代に帰属するのも、これまでの東中山台遺跡群の調査成果ともよく符合する。

報告した堅穴住居でもっとも古く位置づけられるのは、いわゆる北武藏系の暗文土師器坏(8)が出土したS I 002で、同種の破片資料が出土したS I 00も同時期と考えられる。S I 001から出土した丸底の土師器坏(1・2)は7世紀後半に出現し、それ以降徐々に底部が平底化していくという系譜が追える土師器坏である。そして丸底の暗文土師器坏は一般に7世紀末を中心とする時期に比定されているので、S I 001・S I 002の帰属時期については7世紀末の年代観を提示しておきたい。

東中山台遺跡群における集落開始時期の土器群は、土師器坏類では須恵器模倣坏を主体とするものになるので、7世紀第3四半期を中心とする年代が考えられる。本郷台遺跡第7次調査⁽¹⁾のS I 01・S I 17の出土土器群が該当する。そうすると今回報告したS I 001・S I 002の出土資料は、それよりは1段階新しい時期の所産といえよう。

今回の出土資料中、確実に8世紀前半として押さえられる資料はなかった。その後の8世紀第3四半期では、S I 008の出土資料が該当する。S I 008で出土した永田・不入産の須恵器(45・46)は、永田5号窯式に相当すると考えられ、曆年代は8世紀第3四半期前半に位置づけられ⁽²⁾、須恵器高台付(47)も同様であろう。また土師器では、下総の場合、8世紀第2四半期から内外面を赤色塗彩したロクロ土師器が出現する。(51・52)は初源期の一群よりは器高が高く、口径と底径の差も少なく、後出的な要素が強いので8世紀第3四半期の年代をあたえておきたい。なおS I 008からは数点の墨書き土器が出土しているので、東中山台遺跡群ではほぼこの時期から墨書き土器が出現するのである。

次の段階がS I 004である。土師器坏(23)はいわゆる箱形の坏で、下総では8世紀後半に盛行し、黒色処理した土師器坏(21・22)は9世紀前半に盛行するので、S I 004については8世紀末から9世紀初頭に考えておきたい。

9世紀第2四半期については、八千代市萱田遺跡群北海道遺跡⁽³⁾・佐原市吉原三王遺跡⁽⁴⁾から出土した承和年間の紀年銘をもつ墨書き土器を一つの定点としてみてみると、土師器坏では口径径比が約1.9、径高指数が約31という数値が一つの目安となる⁽⁵⁾。そして新たな器種として土師器皿の出現がある。こうした観点から、S I 003・S I 005・S I 006・S I 007・S I 009がこの段階に位置づけられるであろう。そのなかでS I 003出土の土師器坏(12)は同時期のものとしては、体部の丸みが強く、体部外面にロクロ口目を強く残し、やや特異な存在である。土師器坏のなかで系譜をたどるのはやや困難である。同時期の須恵器坏に似た器形はあるが、金属容器等も視野に入れてその祖型を追求したほうがよいかもしれない。

また土師器壺では同じくS I 003から出土した、底面に回転糸切り痕を残す壺(17)もやや特殊な壺である。8世紀後半にロクロを使用した小型壺が出現するようだが、通常の壺では類例が少ない⁽⁶⁾。東中

山台遺跡群ではこれまで壺B類として、回転糸切り痕を残す2形態の壺が知られている⁽¹⁷⁾。いずれも体部は縱方向のヘラ削りを施している。それらと比較すると、体部の調整手法が明らかに異なり、現段階でこれらを一連の系譜のなかで捉えることはできない。なお壺B類は10世紀初頭前後の年代が想定されているが、共伴した土師器坏類は9世紀後半の年代も含めてもよいと思うので、おそらく9世紀後半のなかで壺B類が製作され始め、その前段階にはミガキ調整を施した土師器壺が存在したといえるであろう⁽¹⁸⁾。

堅穴住居以外では、溝S D001・S D002からは図示できるほどの資料はなかったが、出土した破片資料のなかには須恵器杯類が少なく、土師器坏類はすべてロクロ土師器で構成され、内面を黒色処理したものと含むなどの土器様相から、9世紀第2四半期～9世紀後半の土器群が主体と考えられる。本郷台遺跡第1次調査でみつかったS D001・S D002に連続する溝（第2号・第3号溝）の出土資料については、8世紀後半～9世紀代の資料が大半といわれている⁽¹⁹⁾。今回の出土資料はさらに時期を限定する資料ということになる。ただし出土資料自体が溝周辺に展開した集落の時期的変遷に左右されることなので、一概に溝の存続時期の違いを示すとはいいきれない。

土器以外の出土遺物としては、東中山台遺跡群では、調査地点によって鉄器類の出土量が多いことを指摘されることがある⁽²⁰⁾。今回の出土資料はその多寡を問題とするほどではないが、そのなかでS I 009から出土したクルル鉤（11）は、施錠対象の施設とも関わる貴重な資料である。この種の鉤は、その大きさや民俗資料の使用例から、通常「倉」の鉤と考えられている⁽²¹⁾。今回の調査では明らかに倉と考えられる絶柱建ちの掘立柱建物は確認できなかった。側柱建物にどの程度、倉としての機能を認定すべきか問題は残るが、今回の調査地点も含めた一郭に管理機能を備えた倉が存在したことはじゅうぶん想定しておかなくてはならない。東国的一般集落では、9世紀第2四半期以降、この種の鉤の出土例が増加する傾向にある。今回の資料もまさにその流れのなかで理解することが可能だが、そうした背景に郡倉の分置など、公権力の関わりかたなどが今後の検討課題であろう。

第2節 墨書き土器について

東中山台遺跡群が多文字墨書き土器分布圏の外縁部に位置するものの、出土した墨書き土器はほとんどが一字文字で構成されている。

墨書き文字資料は30点、刻書き資料が1点あり、朱書き土器は1点もなかった。もっとも多い文字種は「井」で、文字点数としては14点あり、そのうち1点が刻書き資料である。8世紀後半から9世紀前半までのあいだ存続する文字種である。「井」は道教や陰陽道で使われる「九字切り」の変形体で、「九字」は除災招福の呪句と併記される場合が多く、「井」もそうした意味で記載されたのであろう。また「井」には終画を右に跳ね上げる例が2例（26）ある。隣接地の本郷台遺跡第2次調査地点でも同じ文字種が数点出土しており、「北」の釈文も考慮に入れている⁽²²⁾。しかしこの字形は8世紀段階には存在しない字形なので、ここでは「井」の変異形と考えておきたい。

そして次に多いのが「太」で、10点あり、S I 009から集中して出土している。書く部位を変えて「井」と組み合わせて墨書きした例が3例（64・70・74）ある。側面の「太」には正位で書いたもの（64・74）と横位のもの（70）の二者があり、破片資料ではすべて正位で書かれている。「太」の意味するところは不明だが、S I 009出土の「井」とだけ組み合い、きわめて限定的なことを考慮にいれれば、人名の一部になる可能性があるのではないだろうか。なお本郷台遺跡第2次調査地点では「大」が2点出土しているだ

けで、「太」の出土例はない。

(40) の「酒杯」については、県内の例では 8 例以上あり、いずれも底部に記載するが、内面と外面に記すものの二者があるが、後者が多い。「酒杯」の意はあまりにも直接的だが、底部外面に記載する例が多いのは、保管・管理が目的で記載されたからであろう。なお「酒杯」の墨書について、官衙・集落のどちらからも出土することから、「厨」の墨書土器と同様の機能か、酒を使用した村落祭祀に使用されたと考えられている¹³⁾。

集落出土の墨書土器について、特定の文字種の消長を集落の変遷のなかで捉えて、集落を構成する竪穴住居群のブロックを表徵する文字種の存在が明らかになっている¹⁴⁾。東中山台遺跡群では、面的な調査面積が小さく、遺跡内の竪穴住居群のまとまりまで把握できないのが現状である。しかし今回の調査地点と東側に隣接する本郷台遺跡第 2 次調査地点とでは、基本的な文字種である「井」が共通し、両地点を一つのブロックとしてくくることができる。そして今回の調査地点の西北 75m に位置する本郷台遺跡第 1 次調査地点では「福」・「永」が大半をしめ、ここだけで独立したブロックを形成している。すると両者の間には何らかの境界が存在したことうかがわせる。なお東中山台遺跡群の場合、基本的な文字種が竪穴住居群の集団を表徵するものであっても、その内容が吉祥句や呪句に共通する文字種であることが特徴といえるだろう。

- 注 1 荒井英樹ほか 2000『本郷台遺跡第 7 次発掘調査報告書』船橋市遺跡調査会
2 郷堀英司ほか 1993『永田・不入窓跡』『研究紀要』14 (財)千葉県文化財センター
3 阪田正一ほか 1985『八千代市北海道遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—』(財)千葉県文化財センター
4 栗田則久ほか 1990『佐原市吉原三王遺跡—東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 5 (佐原地区 2) —』(財)千葉県文化財センター
5 八千代市上谷遺跡では「延暦」・「弘仁」・「承和」等の紀年銘の墨書土器が出土している。
6 藤岡孝司 1987『八千代市北海道遺跡』『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
7 小林理恵 2000『東中山台遺跡群(11)』(財)船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
8 埼玉県には東北系とともに目されている土師器ロクロ壺がある(富田和夫 2002『飛鳥・奈良時代の官衙と土器』『板東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古別冊 6)。
9 道上 文ほか 1998『本郷台遺跡』『千葉県の歴史』資料編 考古 3 (奈良・平安時代) 千葉県
10 岸本雅人 2000『船橋市東中山台遺跡群第 14 次調査地点』(財)千葉県文化財センター
11 合田芳正 1998『古代の鏡』ニュー・サイエンス社
12 石井穂 1983『墨書土器について』『本郷台 II』船橋市遺跡調査会・本郷台遺跡第 2 次調査団
13 鬼頭清明 1995『墨書土器の一考察』『日本古代国家の展開』下巻 思文閣出版
14 平川南ほか 1989『古代集落と墨書土器—千葉県八千代市村上込の内遺跡の場合—』『国立歴史民俗博物館研究報告』第 22 集

写 真 図 版





1 SI001全貌



2 SI001カマド全景



3 SI001カマド内遺物出土状況



4 SI001カマド遺物出土状況



5 SI001カマド脇遺物出土状況



6 SI001焼土検出状況



7 SI001鉄滓出土状況



1 S1002全貌



2 S1002具層様出状況



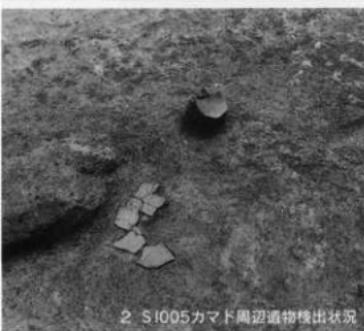
3 S1004遺物出土状況



4 S1004全貌



1 S1005全景



2 S1005カマド周辺遺物棲出状況



3 S1005遺物出土状況



4 S1007全景



1 S1007カマド周辺遺物検出状況



2 S1007カマド周辺遺物検出状況



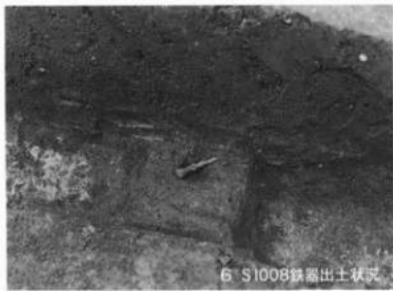
3 S1007遺物出土状況



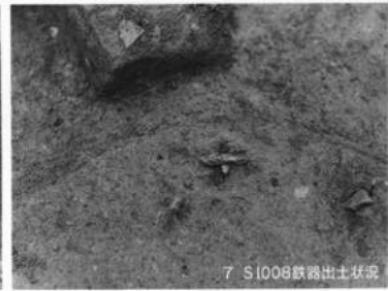
4 S1007鉄器出土状況



5 S1008全景

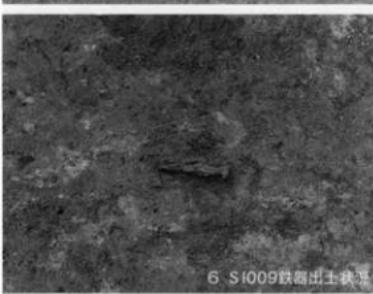
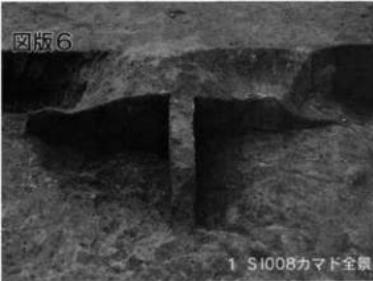


6 S1008鉄器出土状況



7 S1008鉄器出土状況

図版6

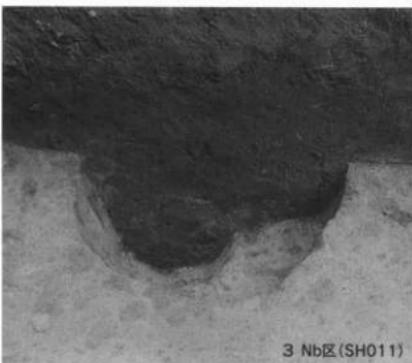




1 Na区(SI006)



2 Nb区(SB004・SH010)



3 Nb区(SH011)



4 Nb区(SK002)



5 Nc区(SD001・SD002)



6 SD001断面



7 Nc区(下層断面)



8 Nd区全景



1 Nf区 (S1003)



2 Ng区全貌



3 Sa区全貌



4 Sa区下層確認状況



5 Sc区南側



6 Sc区北側



7 Nd区 (SB002)



8 調査区周辺の状況



2



3



4



8



21



9



12



25



26



27



37



17



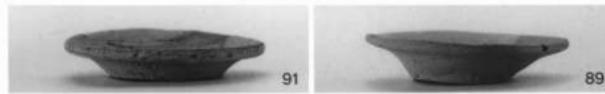
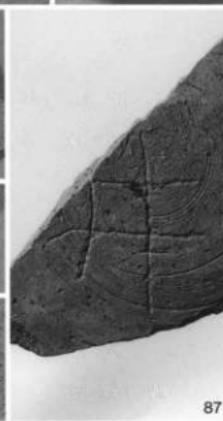
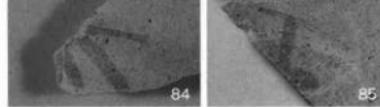
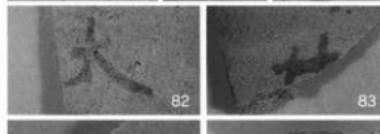
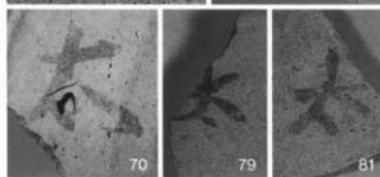
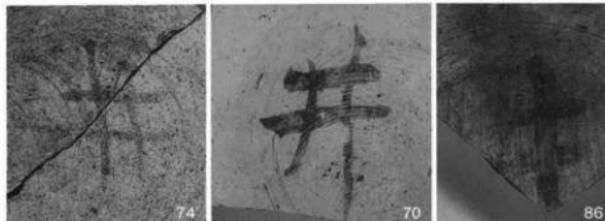
28



38

図版10





報告書抄録

ふりがな	ひがしなかやまだいいせきぐんだい19じちょうさちてん						
書名	東中山台遺跡群第19次調査地点						
副書名	地方特定道路整備委託（西船埋蔵文化財調査）報告書						
卷次							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第450集						
編著者名	今泉潔						
編集機関	財団法人千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦 2003年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
東中山台 遺跡群第19次 調査地点	千葉県船橋市 西船橋6丁目 131番6ほか	12204 012	35度 42分 40秒	139度 57分 32秒	20010402 20010531	1,280m ²	地方特定道路整備委託（西船埋蔵文化財調査） に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
東中山台 遺跡群第19次 調査地点	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居 掘立柱建物 溝状遺構	9軒 4棟以上 2条	土器類（土師器・須恵器・灰釉陶器、墨書き土器〔「井」・「太」・「花」・「福」など〕 金属製品（刀子・鎌・鉄鎌・クルル鎌・鉄滓など） 土製品（土質支脚） 自然遺物（ハマグリ・マガキ・シオフキ・マテガイ・バカガイ・ウミニナなど）	下総国葛飾郡栗原郷の一角に比定される東中山台遺跡群の調査。7世紀後半から9世紀代にかけての集落跡で、「井」「太」の墨書き土器がややまとまって出土した。またS I 002にはマガキ・ハマグリを主体とする貝層があった。	
		中世	土坑	2基	カワラケ・陶器		

千葉県文化財センター調査報告第450集
東中山台遺跡群第19次調査地点
— 地方特定道路整備委託（西船埋蔵文化財調査）報告書 —

平成15年3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

発 行 千葉県都市部
千葉市中央区市場町1番1号
財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株式会社 エリート印刷
成田市並木町44-20
